

フロシューム

明るいふれあい・協同のネットワーク

PROSUME

●食卓の向こうに産地が見える●

Pepper

Carrot

よりよき生活と平和のために
大阪よどがわ市民生活協同組合



五眼で見た 日本の 農業と食糧

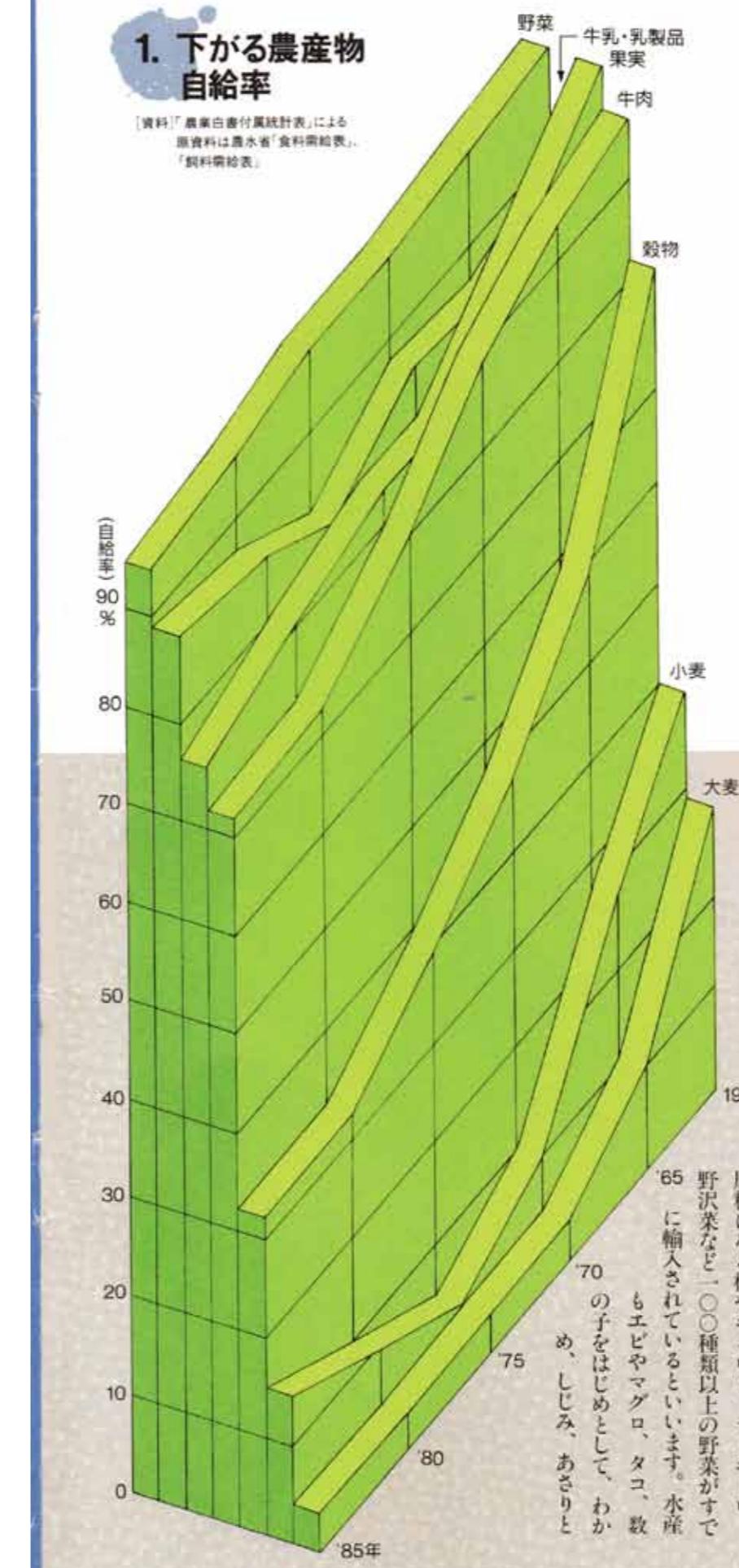
二宮厚美

百聞は一見にしかず、万言をつくした美人論を聞くよりも美人はまず見るほうがいい。それと同様に、芝居を論ずるためにはまず芝居を見なければならず、農業問題を考えるためににはまず自分の眼でその実態をとらえることが必要です。ではいま農業・食糧問題の実態をどううえ、どう見るか。そのためには少なくとも「五つの眼」をもつことが大切になります。「五つの眼」とは、「見つける、見つめる、見わたす、見とおす、見なおす」の五眼。



食卓をおおう輸入モノ

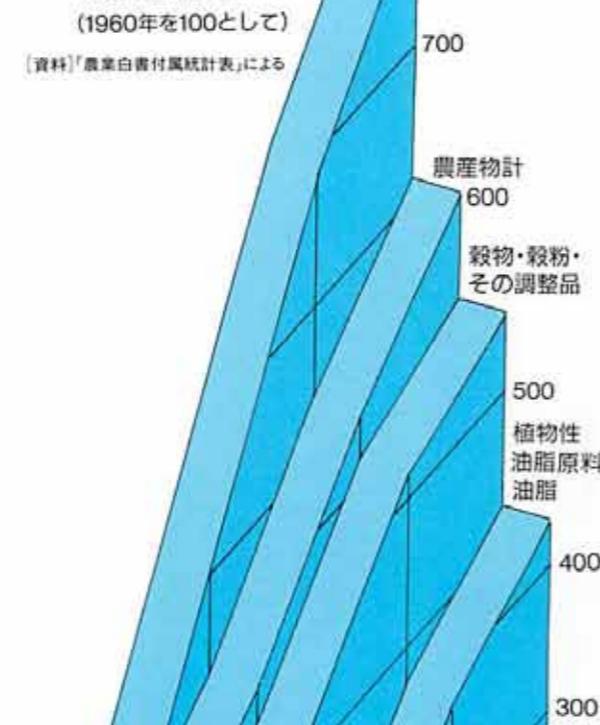
まず最初は問題や課題を見つけること。たとえば、現代日本の食糧自給率はどうなっているか、農産物の輸入自由化はどうなっています、どういう問題をよりおこななどの課題を発見、もしくは再発見することです。およそ二五年までの一九六〇年には八二%であった穀物自給率は、いまや三割ちょっとにおちこんでいます(第一図)。



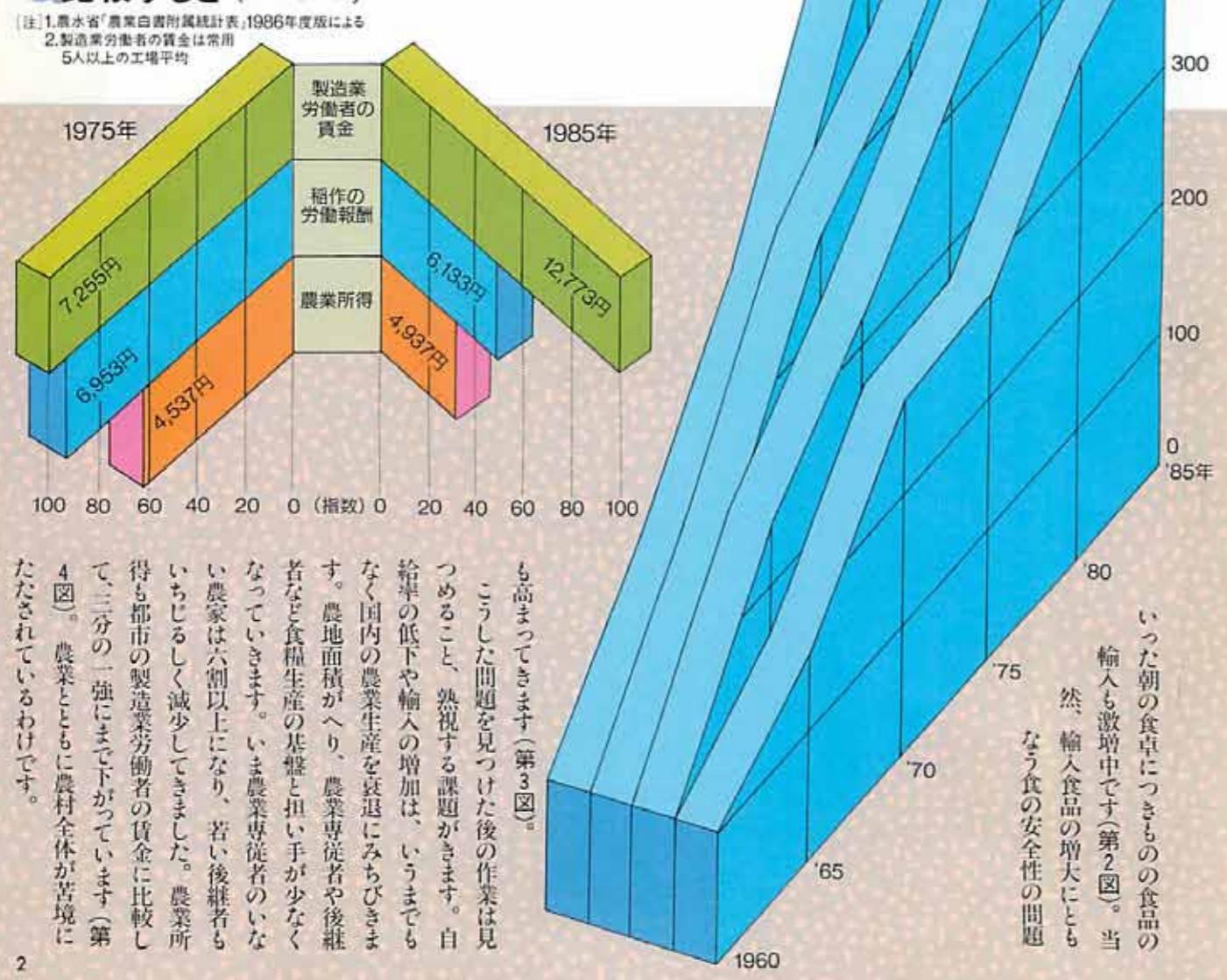
3. 食品衛生法違反事例



2. 増大する農産物輸入数量



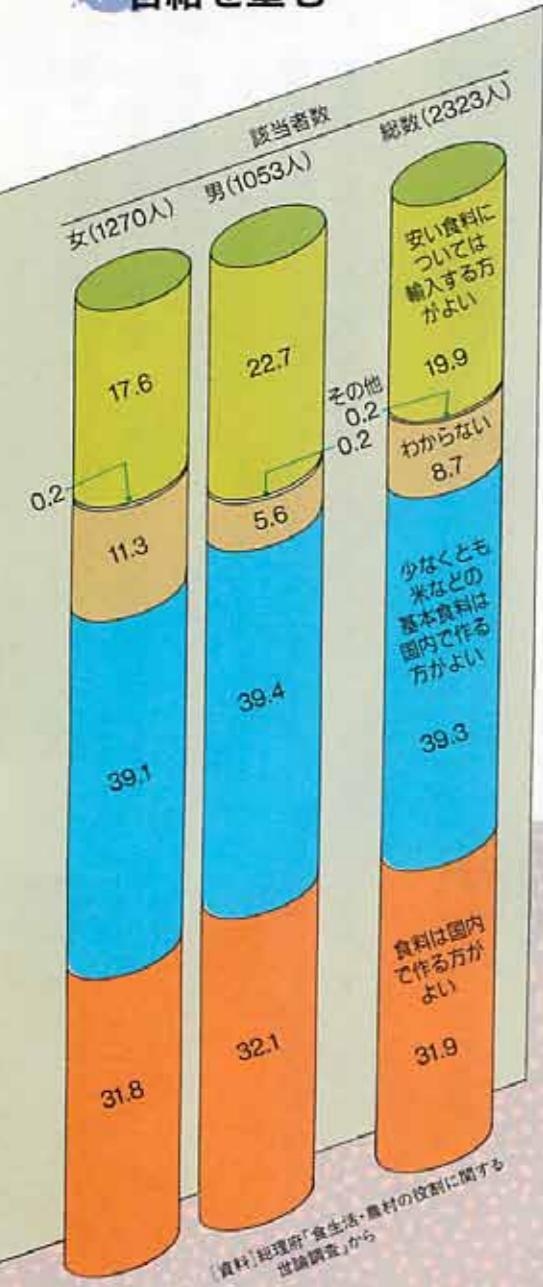
4. 労働者の賃金と農業の所得を比較すると(1日当たり)



いつた朝の食卓につきものの食品の輸入も激増中です(第2図)。当然、輸入食品の増大とともに

なう食の安全性の問題

8. 国民の7割が 自給を望む



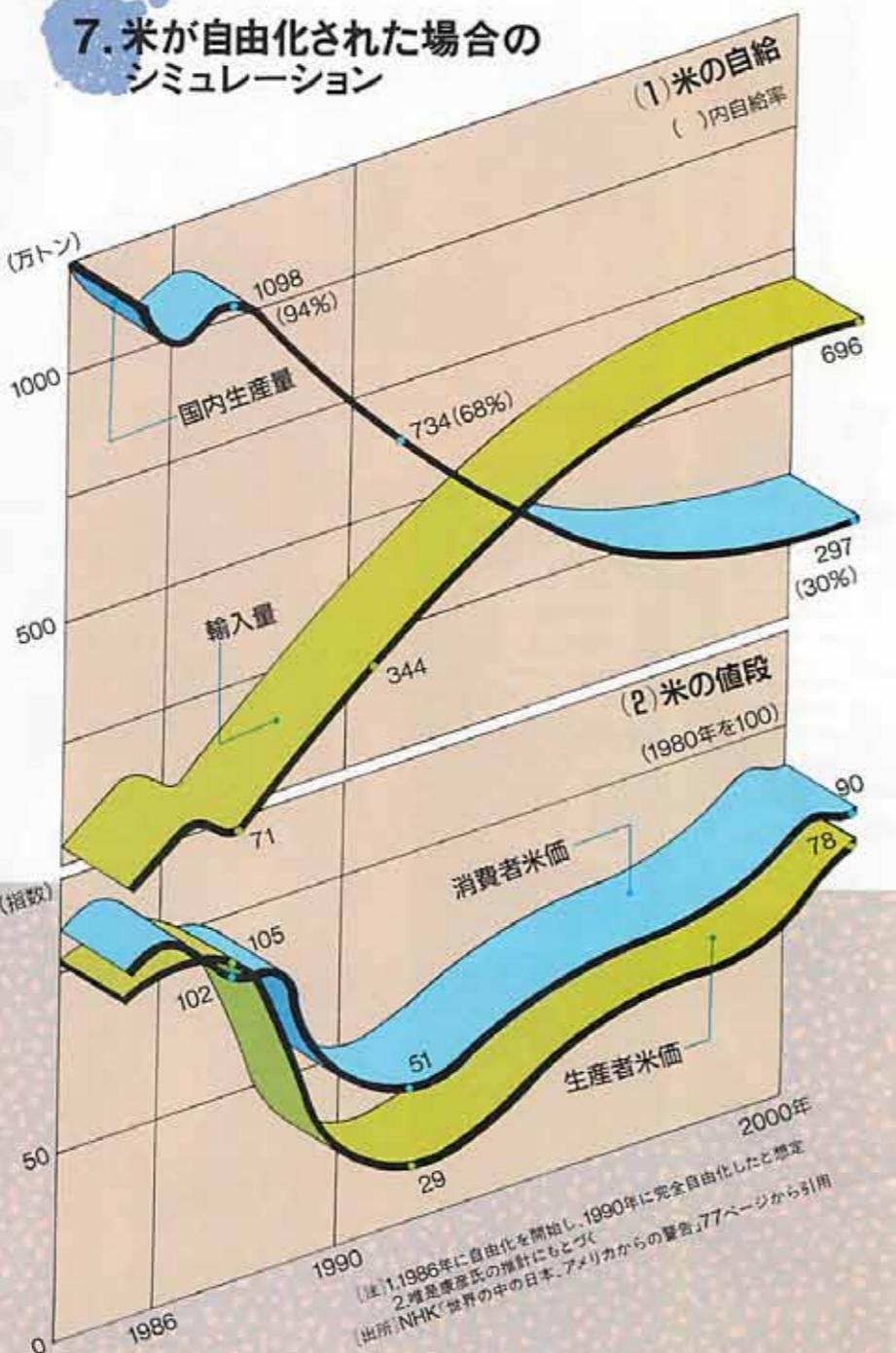
見とおしたあとで、最後に、もう一度農業と食糧を見なおしてみると、それも農業をつぶすのではなく育てる視点と私たちの食生活を守る視点にたって見なおしてみること。国民の七割以上の人気がいまま主要食物の自給を望んでいます(第8図)。このパンフは、読者が自分の眼で農業と食を見なおす際の素材をつづくページで提供します。

食と農を見なおす

それは一九九〇年に米が完全に自由化された場合の将来予測があります。一〇年後の二二世紀初頭には米の自給率は三割におち込み、農家戸数も現在の四三七万から二〇〇万戸へ、およそ三分の一に激減するというものです。（千葉大学唯是康彦教授の試算、第7図）。

この分析をてがかりにして、田代洋一教授（横浜国大）は、米の完全自由化のあと少しはその値段が安くなるかもしれないが、それは一世帯あたり月額にしてたった六〇〇円ばかりの節約にすぎず、コーヒー一杯とタバコ一箱ぶん程度のこと、それと引き換えに失うものはあまりにも大きいのではないか、と指摘しています（『日本に農業はいらぬいか』大月書店）。まことにもつともな指摘です。

7. 米が自由化された場合のシミュレーション

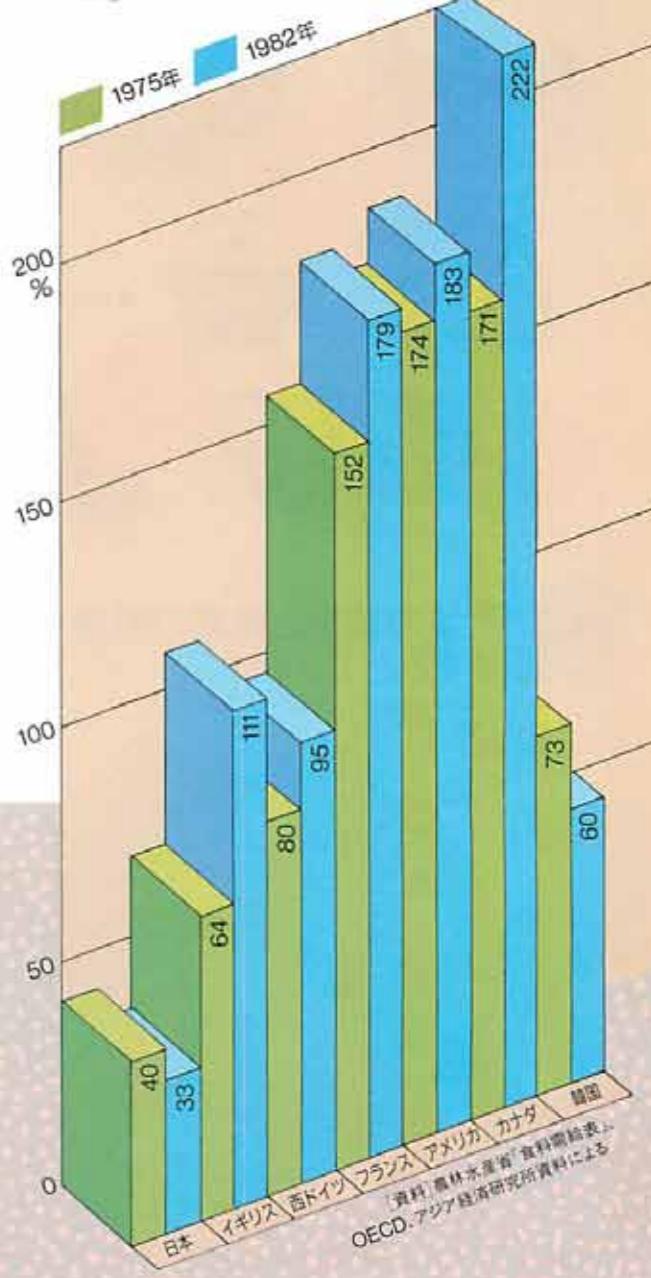


6. どの国も農産物は輸入制限している

6. どの国も農産物は輸入制限している

	品目(品目数)
日本	<p>国境保護措置</p> <ul style="list-style-type: none"> ●残存輸入制限品目 ●国家貿易品目 ●自由化義務等免除(ウェーバー)品目 (ガット上認められており、実際に輸入制限(課徴金を含む)を行っているもの) ●食肉輸入法による輸入制限品目 (輸入が一定量を超える恐れがある場合、食肉輸入法に基づき、輸入制限が発動されるもの) ●その他の輸入制限品目(砂糖関係)..... <ul style="list-style-type: none"> ●牛肉、オレンジ等農産物(19) ●水産物(3) ●米、麦、バター等(5) ●酪農品、ピーナッツ、綿等(14) ●食肉(牛肉、山羊肉、羊肉)、牛乳調製品(2) ●砂糖、糖水、モラセス(3)
アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> ●残存輸入制限品目
フランス	<ul style="list-style-type: none"> ●残存輸入制限品目
西ドイツ イギリス	<ul style="list-style-type: none"> ●共通農業政策に基づく課徴金制度
ON	<ul style="list-style-type: none"> ●加入議定書免責—スイス ●残存輸入制限品目—ノルウェー
その他	<ul style="list-style-type: none"> ●酪農品、野菜類(88) ●食肉、酪農品等(48) <p style="text-align: right;">〔注〕農政省報告・参考資料による</p>

5. 主要国の食料自給率は 上がっている



三分の一に激減する農家

こうした農業危機の状態を、こんどは視野をひろげて見わたしてみること、これが第三の眼です。たとえば、わが国ではいま竹村健一、大前研一、堺屋太一、渡部昇の各氏ら(通称サンビンとかヨンビンと呼ばれるタレント評論家)が、わが国の農業は過度に優遇され、そのおかげでサラリーマン家庭は多大の損害をこうむつていると喧伝していますが、はたしてどうか。農産物の自由化を国際的常識としてさかんに主張するこれらの議論にはんして、むしろ国際的には人間の生活の基礎を担う食糧の自給を維持する方向こそが常識であることを見ておかなければなりません(第5図)。

食は「安心・安全・安定」の「三安」を必要とし、

それをもとにして「文化・文明・文芸」の「三文」を育てる。

「食の三安」が農業自由化のなかでゆらぐいま、

「食の三文」にも大きな転機がおとすれようとしている。

この時、食と農をいまあらためてどうみるか、

その切りくちを(二)では各界から語つてもらう。

「食」と農業(二)、地域社会形成のベース

●産直への期待



●ECO諸国の農業から学ぶ

本米、貿易には適さない生産物なんだ
という事実です。全世界の生産高で、
貿易にまわされるのは小麦で二〇%、
大豆が二〇%、米はわずか四%にすぎ
ません。生きている農産物を遠くへ運
ぼうとすれば、早く採り入れたり薬品
を使つたり、安全性も質も低下せざる
いられません。

農業を、大企業の犠牲のためにつぶし
て無理に輸入をはかるのはまったくの
愚行で、そのための世論操作も卑劣な
作風と思わざるを得ません。この点で
はマスコミもだめです。台湾の農民の
抵抗運動も他国のこと、と傍観しては
いられません。

暉峻淑子

●「食」の基本と作風をもつ操作

昔の人は、「医食同源」といいました。
快適な食生活と健康との深い関係は、
だれでもよく分かっていることでしょう。
いま、食べ物の安全がさかんに問
われています。なぜ安全性が問われて
いるかといえば、その根本には、家族
で安心して楽しく「食」をとり、健康
にくらしたいという願いがあるからで
す。

ロボットに油をさしたり、車にガソリ
ンを入れるように「食」を考えないでく
ださい。家族と一緒に落ち葉いて楽し
く食事をする。それが人生の楽しみで
もあり、健康に生きる出発点でもある
と思います。健康な身体に健康な思想
も宿る、といいますから。日本人は「食」

を、健康、思考、人間関係、文化の基
本と考えるべきではないでしょうか。

それができない効率主義、経済性第一
主義の社会には、どこかに歪みがある
と考えるべきです。

農産物を輸入するという問題の大前

提として考えてほしいのは、農産物は

を得ないでしょう。これまでほどこの
國も、農業を金もうけの手段やその犠
牲にしようなどと考えたことはなかっ
たのです。

農産物を輸入して恩恵を受けるの
は、過剰輸出をもつとづけたがって
いる上位二〇社ほどの輸出企業だけで
はないですか。国内で十分供給できる

地で営むものという発想が、そもそも
地との交流が望ましいように思いま
す。食糧は生き物ですし、輸送のコスト
やトラックの排気ガスをなくすため
にも、いまは無理でも、日本でもどう
いう形態を可能にする道を、もつと考
えなければいけないでしょう。

農村は過疎、都市は過密。日本では
それがあたりまえの姿のようになつて
いますが、農業は都市から遠く離れた
地で営むものという発想が、そもそも
間違いのもとだと思うのです。EC諸
国では、どんな都市でも都心から二〇
分も歩けば、かなり近郊に農地があ
ります。パリだってちょっと外へでる
と、牛が歩いてるじゃないですか。都
市計画自体がそういうかたちでおこな
われ、都市と農村が密接に結びついて
いるのです。農村も土地整備で、実際に
美しく自然が保存されています。国土
の美を、農民も都市住民もたんのうで

きるかたちで生活圏がかたちづくられ
ています。

逆に都市でも、日本でいえば丸の内
のよろなところに青空市場が開かれて
います。「窓を開ければ煙が見える」と
いうふうに、生産者と消費者が顔をつ
き合わせて暮らしているんです。です
から農民も、いつでもオペラや劇を見
に行つたりして、都市の文化を享受で
きるところで農業を営んでいます。經
済効率を優先させるのではなくて、常
に小さな経済圏を守つていこうとす
る。それが本来のコミュニティだと
いう発想が、根底にあるからなんです。

日本の「産直運動」もさかんになつ
てきましたが、物とのかわりだけを
追求しないでください。消費者が生活
圈のなかにある近くの生産地へ出かけ
て行って、子ども連れて農業を手伝つ
てみるのもいいでしょ。生産者と消
費者が近距離でより密接に結びつき、
自分たちの地域社会をつくる方法
を。これからはそぞうう方向を考えて
いってほしいと思います。

西ドイツの財界などは、自国の農業
にたいして工業のパートナーだと考え
ています。農業は自分たちのパートナ
ーであり、農民がうるおうことは内需
拡大にもつながるし、生活をしていく
うえになくてはならないものと考えて
いるからです。でも、経済のためばか

●農業の大事故と産直への期待

私はこの日本に、あまりもつからな
いのに農業を営みつづけている人がい
るというだけで、ほんとうにありがた
いと思っています。農産物輸入自由化
とからんで、日本は「工業立国」をめ
ざすべきで農業はいらない、といつて
は環境産業なんですね。そんな考
えは、柱のない家について論じてるよ

りではありません。

農業とはいつたないなんでしょうか。
西ドイツでは、一兆五〇〇〇億円のあ
がりしかない農業に、一兆六〇〇〇億
円の援助を注ぎこんでいるのです。

「産直運動」について一つ注文したい
のは、なるべく多くの消費者が参加で
きるオープンなものにしていてほしい
ということですね。貧乏な人でも無
農業のものを食べられるような方法を
考えてほしいんです。

そのためにはまず第一に、低農業
とか。長い時間のなかで、孫の代まで
考えて生産をする産業は、農林水産業
だけでしょう。

「産直運動」について一つ注文したい
のは、なるべく多くの消費者が参加で
きるオープンなものにしていてほしい
ということですね。貧乏な人でも無
農業のものを食べられるような方法を
考えてほしいんです。

安全性や有機栽培の基準を、全国の生
協が集まって消団連なんかと一緒に
つて早く作るべきですね。国や厚生省
はあてになりません。西ドイツはもち
ろんイギリスなどでも有機農業の支持
者が独自の基準を作っています。かな
りずしも完全な無農薬をうたわなくて
もいい。ABCのようなランクがあ
って、値段が高くなるものについてはE
Cのように国から補助金を受け、一般
の価格のみにして、もつと多数の国民
に開かれたものになっていくように、
農政を動かしていくことが大事ではな
いでしょ。

●てるおか・いつこ

教授 機械学者(生活経済学専攻)
ほんとうの豊かさ、人間らしい暮
らしや地域や生き方についても
とも積極的に發言している学者の
一人。主な著書に「生活経済論」
「ひとりの農業」など多数。文化
にも明るく、絵本「サンタクロ
ースってほんとにいるの?」(福音
館)は五〇万部をこえる。



西ドイツ・ミュンヘン近郊の農地



西ドイツの財界などは、自国の農業
にたいして工業のパートナーだと考え
ています。農業は自分たちのパートナ
ーであり、農民がうるおうことは内需
拡大にもつながるし、生活をしていく
うえになくてはならないものと考えて
いるからです。でも、経済のためばか

山田達夫 理不尽な自由化要求

昨今、アメリカからの理不尽さわまりない農産物自由化要求と、それに呼応する根拠のない無責任な自由化促進論がかまびすしい。

アメリカによる自由化要求は、その程度と質の差を別にすれば、一九六〇年安保体制以後、ドル防衛・ドル危機が叫ばれるたびに繰り返され、日本政府も国際協力を名目に譲歩を重ねてきた。かつて一〇一あつた制限品目も、いまでは先般受け入れ表明した八品目をふくめて二三品目である。しかも、制限品目として残っていても輸入割当数量は大幅に増え、また、調整品などの名目で類似品の輸入が増大するなど、残存制限品目の実質的な骨抜きがすすんでいる。こうしていま、日本は世界最大の農産物輸入国となり（八七年輸入額一一〇億ドル）、その三分の一はアメリカからの購入である。

にもかかわらず、アメリカは一二品目、牛肉・オレンジ、米についての自由化要求を、これまでにない強引さと身勝手ながちで日本に押しつけてきている。ガットへの身勝手な条項解釈の押しつけや、自国の制限措置は棚上

げにして、日本には、完全な自由化を要求するという、なりふり構わぬ理不尽な態度は一体なぜなのだろうか。

第二次大戦後に成立したアメリカ支配の世界秩序、パックス・アメリカーナと呼ばれるこの世界秩序は、一方で核戦略と密く結びつきながら他方ではガット・IMF体制を軸に展開してきた。世界通貨としてのドルのたびたびの危機に対応して、通貨体制はその都度、再編されてきたが、今日、アメリカは、いわゆる双子の赤字を抱え、世界最大の借金国に転落し、パックス・アメリカーナ崩壊の第一歩が始まりつづる。G5・G7などを通して、その維持再編策がドル安・円高体制のもとにすすめられようとしている。アメリカの輸出拡大による貿易収支の改善が、財政赤字の克服とともにドル信用の回復につながり、戦後世界資本主義体制維持のための死活をかけた重要な課題の一つとなってきたのである。

加えて、とりわけ農産物自由化要求がつよいのは、第三の武器としてのアメリカの食糧戦略の破綻にともづいて、農産物をすべて自由化して、米・小麦・牛・豚肉など主要農産物を全量輸入してみても、アメリカの対日輸出額は一三〇～一五〇億ドル程度（現在七三億ドル）と見られる。これは輸出不振にあえぐアメリカにとってはたしかに少ない。全品目を自由化しても第二国からの輸入がアメリカからの輸入を上まわる場合も少なくない（今回代償措置を認めた二品目はその一例である）。

だとすれば、いまのアメリカの強硬姿勢は、日本をスケープ・ゴートにした他の狙いがその奥にあると見ていい。それは、ガットの場を利用し、ガット条項の新解釈をふくめて加盟国に日本を自由化を了承させ、その成定を認めることである。当然にそれは補助金と課徴金制度などの輸入制限の各統一と課徴金制度などの輸入制限の各統一を要求するものである。そうなれば、アメリカの農業生産の優位性から見て、輸出は大いに伸び、食糧戦略も再編復活するというのがアメリカの「自由化」の論理である。「自由化」

「食」と
「暮らし」と
「農に
こだわる

るおびただしい滯貨が生じている。

ECは、各種の農業保護政策をとつていて、以前からアメリカとの間でガットへの提訴合戦が繰り返されていたが、保護政策によってEC諸国との農業生産量が増えたこともある、アメリカのEC向け輸出は、七〇年代に比べて三分の二に落ち込んでいる。また、スペイン・ポルトガルのEC加盟によって、スペイン向け輸出が、かなり減ってきていているという状況もある。そのためアメリカは輸出不振挽回のため八〇年代中頃から各種の輸出補助金を大幅に増額して回復に努めてきたが、各国の対抗措置もあって回復の兆しは見られない。こうした輸出挽回の矛先がいま、ほかならぬ日本に向かられてきているのである。

自由化要求が、とくに日本にたいして強硬に向けられている理由として、日米間の貿易収支の極端な不均衡などが挙げられている。しかし、一昨年来

のアメリカの攻撃を見ていると、日本

の完全自由化を求めるだけに留まらない狙いがあるように思われる。日本の生産量が増えたことによって、アメリカのEC向け輸出は、七〇年代に比べて三分の二に落ち込んでいる。また、スペイン・ポルトガルのEC加盟によつて、スペイン向け輸出が、かなり減ってきていているという状況もある。そのためアメリカは輸出不振挽回のため八〇年代中頃から各種の輸出補助金を大幅に増額して回復に努めてきたが、各国の対抗措置もあって回復の兆しは見られない。こうした輸出挽回の矛先がいま、ほかならぬ日本に向かられてきているのである。

自由化要求が、とくに日本にたいして強硬に向けられている理由として、日米間の貿易収支の極端な不均衡などが挙げられている。しかし、一昨年来

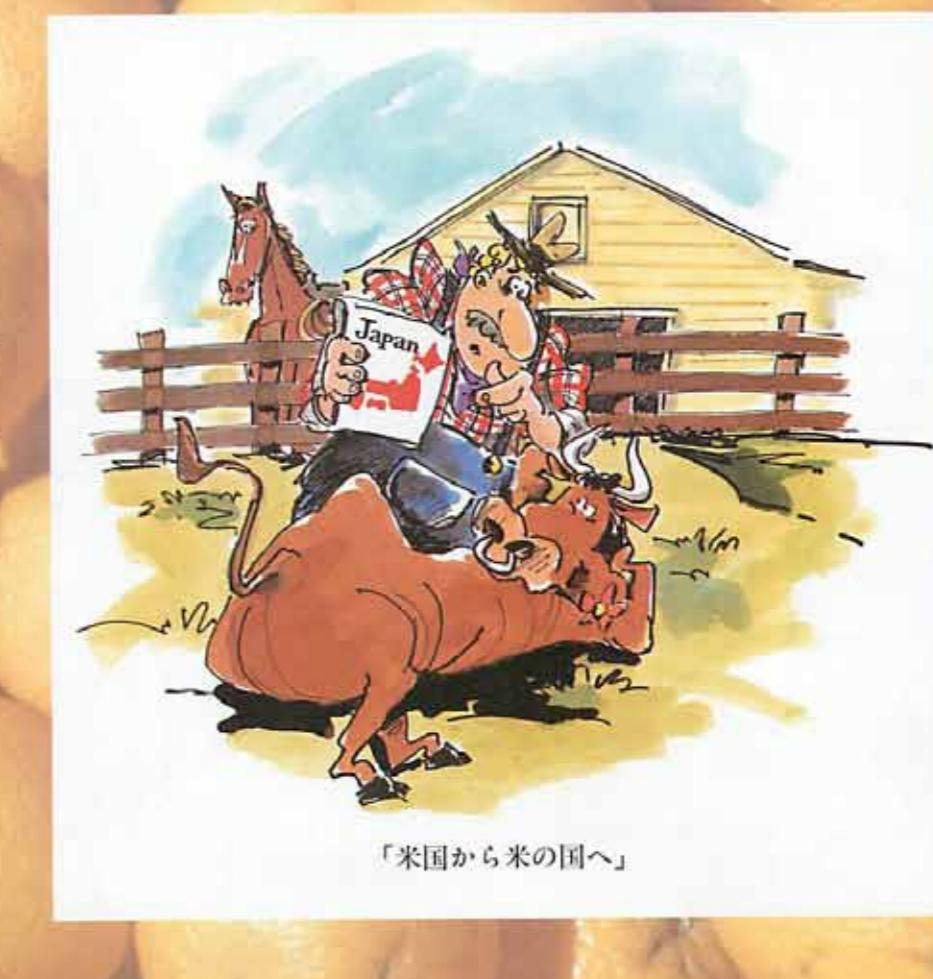


日米の牛肉・オレンジ輸入交渉



●やまだ・たつお

一九二九年生まれ。京都大学農学部向学修了。現在大阪経済大学経済学部教授。就任して、お母さん組合員たちと「日本のコメ・農産物・食料・食卓はどうあるべきか」と対話を重ねている。著書に「生産運動の新時代」(共著)、労働問題の「近畿農業の歴史的展開」(編著)、日本経済評論社などがある。



「米国から米の国へ」

北の大地

離農の国にたしかな息吹

●北海道十勝・折笠農場グループ

矢吹紀人

●北海道農業の崩壊のフチで

太平洋に流れこむ十勝川の下流 豊頃町の三間さんは父親の代から大豆を中心いて生産している。

二〇年ほど前に農家を継いで以来、なぜ小豆を作らないかといわれつづけてきた。かつて「赤いダイヤ」と呼ばれた小豆は、いまでも割りの良い高級品目として通っている。

「げんどうね、オマエんとこの大豆はいい、こういうのがほしいんだってオヤジの代からいわれてきたかんね。やっぱ、ほしつついわれるもん作りたいんだわ」

求める人がいるから、作りつづけて

きた。だが三間さんの思いを込めた大豆もバレイショも、いま、開拓以来最

大の危機に瀕している。農産物輸入が自由化され、決定的に安いコーンスタークなどのデンブンが入ってきた場合、どう考えても十勝の農民にはたちうわでさるはずがない。

「自信ありますよ、作物にはね。私ら、人に負けんないもん作って貰つてもらいう以外ないから。けど、二五八二〇〇〇円のデンブンなんか作つてもメシは食えないんですよ」

三間さんはいう。カリヲルニア米がうまいと宣伝されるが、手間をかけた日本の米には及ばないのが事実だ。味や品質で勝負できるなら、自分たちはなにがあつても怖くはない。だが、生産規模といえば一戸平均二六ヘクタ―

ルの豊頃の農民には、コストでアメリカ、カナダに対抗することはできない。「三年も食べ比べれば、少し高くつてもやっぱ国内のがいいつてなるに決まつて。その三年の月日を、私らには生き延びるすべがないんですわ」

気がついたときにはもう遅い。三年後にその事実を知られるのは、都市島改造ブームのころ、すでに大豆の自給率は微々たるものになっていた。その冬、アメリカのミシガン湖が凍りつき、大豆の輸出ができなくなつた。大豆産地の十勝ではさす、豆腐の値段がたちまち倍にはね上がつた。自給をしないことがどういう結果を招くかは、歴史が教えている。

北農中央会の試算によれば、一二品目自由化による北海道農業関連等の失敗開拓の歴史は、まだ約八〇年にすぎない。

北に大雪山、西に日高山脈を望む十勝平野の中心帯広に隣接して、幕別町がある。発足当初からよどがわ市民生活と産直取引をつづけている、折笠農場グループのリーダー折笠秀勝さんは、三代六〇年にわたってこの地で農業を営んできた。

二十五年ほど前、まだ一〇代の終わりだった折笠さんが経営の実権を受け継

業は三二万人。経済的影響を受けるのは道民の四割、二三〇万人にのぼるといわれている。失業者の規模だけを見ても、日本経済に与える影響は炭鉱や鉄鋼を上回るものがある。北海道には、もう農業はもどつてこないかもしれない。

「農村は、日本人すべての故郷じやないですか。故郷を守ろうって考えは、町のみなさんにはないんでしょうかねえ……」

自分たちの思いは、消費者には届かないのか。しんみりとした口調で、三間さんは語る。

いだとき、農場の中心作物はビートがしめていた。

昭和三〇年代後半。日本が高度経済成長の渦中にあつたこの時期、十勝の農村にも次々とトラクターが姿を現わし始めた。

開拓以来、北海道農耕の原動力は馬が担ってきた。どの農家でも、經營面積の三分の一は畜舖飼料の牧草地にしなければならなかつた。

機械化がすすむと、馬は必要がなくなつた。牧草地もすべて畑として運用された。生産高は、飛躍的に高まつていった。反当たり収量を上げるために化学肥料が注ぎこまれ、農薬散布量も増えていつた。

そのころから、おかしな病気が出始めたことに、折笠さんは気づいていた。土中にできるキノコの胞子が作物の花につき、実を枯らしてしまう「キンカク」。他にも、以前にはめつたに聞かなかつた病気が、折笠さんの畑にもまんえんした。それを殺すために使われたジプロゾリンは、後に使用禁止となる

地力を必要とする作物に、豆類があらわれた。昔は十勝で種れた大豆や小豆を、汽車で狩勝峠を越えて小樽の倉庫に運び、運河を通つて船でヨーロッパに輸出していた。それほどに、十勝は豊かな土地だった。畜舖のために牧草と畑とを交互に作るやり方が、実は地力を損わない合理的な農耕方法となつて土を守ってきた。

機械化され、二要素をぶちこんで二倍、三倍の収穫ができるようになつたとき、土は完全に無機質化するほど排水されきていた。

反当たり収量を上げるために、だれもが競つて微量養素や農薬を増やしていく。新しい病気には、より強い農薬が使われた。

これまで反当たり一二三、しか穫れなかつたビートを、七、八、九にする挑戦があたりまえになつていて。折笠さんも例外なく、その競争にまきこまれた。

経営を継いで一〇年目に、十勝地区の火山灰土壤ついに反当たり収量のトップ賞に輝いた。

父も祖父も、周りの誰もが喜んだ。



そのなかで、折笠さんの心だけはわき
たたなかつた。

「いは行きへくところまで行きへし
た。このままじや、いすれこの土地で
穫れるものはなくなる。俺はいつか食
つていけなくなるだろう……」

●土に帰る
の反対を押し切って、折笠さんは農場の主力であつたビートから撤退することを決意した。一九七三年、農業を始めて一五年目の、三〇歳のときのことだった。

最後の年には、

かなくなっていた。土は病み疲れていた。

「俺たちには土しかないんだ。たかだかジイサンが開拓した時代にまで帰れば、農業を大自然に返すことができるんじゃないか」

たしかに、自分たちの代になつて収穫高は増えた。だがそのためには、後ろめたい思いで農業もかけつづけた。いまのうちはいいかもしない。だが、搾るだけ搾つて息子たちはどうするのか。一〇〇年先、十勝の農業はどうな

五倍の農地を一戸が抱えることになつた。しかしそれも、農民切り捨ての論理の上で「集約化」されたに過ぎない。借金は、一向に減つていかない。

借財苦、三割が後繼者難で離農の危機に瀕している。残った家も、展望を持つているわけではない。

かつては、離農していった家の農地は残った者が買い入れた。だがここ数年、喜んで農地を買い入れる人は少なくなった。いくら投資しても、利益が上がらない。だれもが農業に魅力を失いかけている。それが北海道の現状なのだろうか。

「なにか」というと、日本農業は過保護だといわれる。だが、補助金や基盤整備でほんとうに農民が潤つたことは一度もないんだ。スーパー農道だって、あんなハイエイみたいのがホントに農道だつていえますか」

一方で農民は、自由化してもやれる。そうに經營努力をしろといわれる。それにたいして、誰もが口をそろえていう。ならば、すべてを自由化して安くしろと。肥料も原料も機材も、すべて自由化されれば日本の農民もコストで対抗できるという事実は、あまり報道されてはいない。

「手足をがんじがらめにしばつておいて、たなかえつたつて土台むりな話だ

● 未来を見すえ

折笠グループでカボチャを出してい
る吉村宗博さんは、中二の長男がい
る。本人はいすれ農業高校へ行き、跡
を継ぐ気になっている。

「父親としては、複雑なんだなさ。日
本の農業の現状を見たり、はたして息
子に継がせたもんがどうなんなかってね
……」

ためらいながら、吉村さんはいう。

農業は考え方を継がせるものだ。折
笠さんは、そういって反論する。グル
ープでやってきたことは、これまです
べて実験だった。考え方の本質は「食」
を作ることであり、形成するの
が「土」というとらえ方だった。物流
を基本として消費者と結びつけ、決
して間違った方向にはいかない。農業
が生活の基本なのだと自信が、一
〇年以上、産直をやってきた折笠さん
たちにはある。

●未来を見すえて

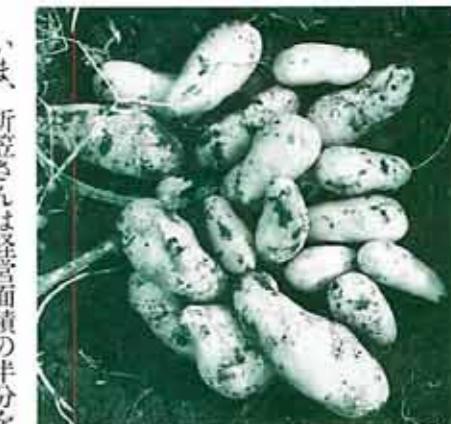
折笠ダループでカボチャを出してい
る吉村宗博さんには、中二の長男がい
る。本人はいずれ農業高校へ行き、跡
を継ぐ気になっている。

「父親としては、複雑なんだわさ。日
本の農業の現状を見たり、はたして息
子に嫌がせたなんかどうなんなかつてね

ためらいながら、吉村さんはいう。

レフでやつてきたことは、これまですべて実験だつた考え方の本質は「食」を作るということであり、形成するのが「土」という考え方だつた。物流

を基本として消費者と結びつければ、決して間違った方向にはいかない。農業が生活の基本なのだと自信が、一〇年以上、産直をやってきた折笠さんたちにはある。



「離農」の国から

を追求するとき、農業は自然からかい離れていく。

産効率を説く。消費者は、生産の現場を知らないからと済ませるわけにはいかない。安値を求めて行きつく先が何かは、折笠さんの経験が教えてくれてゐる。

十勝平野の南部、日高山脈のふもとを流れる歴舟川に沿う大樹町には、畑作、酪農ふくめて約二八〇戸の農家がある。ここ一年ほどの間に、この町から九戸の離農が出た。それでも率から言えば、まだ全道平均より少ない離農率なのだという。

倉が崩れるのが最大の快樂というあさましさですわ

大樹町で畜産を営み、農業委員も務める片岡文洋さんはこういって嘆く。

高度経済成長期に、畜力から機械に代わって多くの農民が土地を離れていった。効率主義で人間が要らなくなつたためだ。この二〇年間に、北海道の農業就業者数は、四五%以上も減少している。残った農民は、さらに経営面積を増やそうと、借金を重ねて機械を買入れた。結果として、昔の四倍、

んな思いや自負を、日本の農民はいつから失つてしまつたのか。
どれほど自信のあるものを作つても、結局は経済効率に負けてしまう。安全な生糞より、農薬責めでも見た目

のいいのが好まれる。しかしそれはほんとうに、消費者の心の底からの声だったのだろうか。安全でおいしい作物。自然と国土を守る農業をつぶさない。

それは生産者にも消費者にも、共通の願いだったのではないか。農業を巻き込む現代の経済構造のなかで失われたものは、金や物以外で生産者と消費者を結ぶ温かく太いきずなだった。

なる物のやり取りの活動ではない。もしかしたら、人間がじかに交流して地域を活性化し、お互いに責任を持つて生命と生活をささえあうという豊かな関係の再構築活動なのかもしれない。だからこそ、崩壊の危機にさらされている十勝の農民が、農協や行政までもが、折笠農場グループに期待を寄せ始めて、もの、はな、どうい。

めでしてゐるのではなした。アーヴィング

14

希望をつくりだす 協同のネットワーク

今崎暁巳



組合長は語る。
「初めは、那賀町農協の青年部一〇人ほどで、なんとか都市消費者と直接つながる道を探そうと、奈良の市民生協の人たちのところへミカンをひき売りしたところから始まりました。生協から生協への紹介で、いすみ市民生協そして、かわち生協、よどがわ生協、みな生協、しろきた生協と、大阪の市



西浦・紀ノ川農協組合長

●和歌山県・紀ノ川農協の顔の見える産直

いま、農業をつづけようと真剣に取り組んでいる農家の方々がよく口にする言葉がある。

「アメリカ農産物輸入自由化とか、農地の宅地なみ課税とか、後継者不足とか、暗い話は十分わかつたから、少し明るい話はないのか」

八七年秋、八八年春と、一度、和歌山県紀ノ川流域の農業地帯を訪ねたが、ここでもたしかに、農業・農村をめぐる暗い状況を見た。まだ、牛肉オレンジ問題が決着していない状況で、八七年末にかけてのミカン価格

暴落の被害は深刻で、消費生協との提携・協同の力を發揮した紀ノ川農協所属の生産者では、八七年の半値、キロ当たり五五円にとどまり、市場流通の冷酷な価格操作にまきこまれた一般農家は、キロ当たり一五円、採取し、ダンボール、運搬代金をかけたら、たいへんな赤字になってしまふ、無惨な現実に直面したのである。

「夕陽を浴びて黄金に輝く紀州のミカン畑……一〇年、二〇年育てあげ、あんなに見事に実つても採つて出荷する労力をかけられんつらさ……首をつる農家も出ます」

紀ノ川流域、そして、和歌山の農村地域全体が、山間部の林業をふくめ、

農協発足六年で、六二年度の実績をみると、県下各地で、組合員の数は、四四班、八〇〇名をこえ、出資金一億五〇〇〇万円、供給高一九億円という成果をあげ、四〇歳を越したばかりの西浦組合長をはじめ、三六名の職員、五〇名から一〇〇名の地元パート雇用をつくり出す力量を備えてきた。西浦

組合長は語る。
「私はその日、西浦組合長のいう、組合員の協力・協同で農地の放棄を防ぎ、その土地を不動産業者に買い叩かせることをさせず、紀ノ川農協組合員の地域班でその土地の管理をし、生産をつづけていく労働力を創出することを始めているのだ。

「私も四〇になるまで、大阪でサラリーマンをしていて、二町五反のミカン農家の跡とり娘だった家内と一緒になつて、それで農業を始めたわけでした

を軸に、北海道の市民生協、東都生協、コードさいたまなど、関東の生協ともつながり、生協同士、生産者同士の全般的協同を強化することを始めた点。

二つ目に、農協組織全体が、消費者との産直に踏みきるようはたらきかけをつづけている点。そして、三つ目は、いま、産直で活路を見出し始めている八〇〇戸農家の協力・協同のよさを守り育てる行動をすでに始めていることを、指摘する必要がある。

つまり、産直センターづくりから始まり、紀ノ川農協の人びとのこの一〇年の努力の中味は、ミカン農家と都市部消費者との連帯づくりを柱に、貫して、和歌山全域の農業・農村を守り育てる産直運動、村づくり運動の姿勢をつらぬきとおしている点が重要である。

最初から参加している那賀町など拠点農家の経営安定にとどまらず、すでに八〇〇戸をこえる農家と各地生協組合員の意欲的な連携拡大にすみ、京阪地域での野菜産直から生産者・消費者の日常的交流の一步を実現しつつあるのだ。

紀ノ川の南岸北岸につづく、ミカン山のたたずまいを見せてもらひながら、西浦組合長が語った言葉が耳にこびりついている。

●多様な労働力づくりで農地を守る

「為政者も流通業界も、いま総合的に農業をつぶす方向にきてるわけですかから、これに対峙するには、消費者の要求にこたえ、手を結ぶことで……ですから、生産者はますなにより、安全・安心でおいしいものをできるだけ安く作る責任を負っているという自觉を育てる努力が第一です。そして、生協・消費者のみなさんと私たち生産者一人ひとりが主人公になって、資本やアメリカの利益のためではなく、私たちのために日本の生活と農業を育てていく協同事業をぜひ実現したいと……」

私はその日、西浦組合長のいう、組合員の協力・協同で農地の放棄を防ぎ、農家以外の人の労働力もかりて農業をつづける努力の現場を見せてもらつた。価格の暴落で意欲を失つたり、生産者が高齢化し、後継者がいないとき、その土地を不動産業者に買い叩かせる

ことをさせず、紀ノ川農協組合員の地域班でその土地の管理をし、生産をつづけていく労働力を創出することを始めているのだ。

「私も四〇になるまで、大阪でサラリーマンをしていて、二町五反のミカン農家の跡とり娘だった家内と一緒になつて、それで農業を始めたわけでした



生産者との語り合い



▼友好菜づくりと生協組合員からの感謝のハガキ



▲友好菜づくりと生協組合員からの感謝のハガキ

ことになっている。要は、サラリーマンだった植田さんの思いにある、しめつけ管理でなく、自発的に気持ちよく協同して働きたいという希望が、パート婦人一人ひとりの労働意欲活性化の原動力となっているのだ。それは、紀ノ川農協がめざす、資本の貢労効でなく、生産協同組合化の摸索である。

「とにかく、農業は明るく楽しくやらなくちやということで、まあよくおしゃべりして、いえ、働くときはもう一生懸命です」

働くときは集中し、休みは陽気におしゃべり——実にメリハリのある働きぶり。それぞれの都合で抜けるときは他の人がその穴を埋め、お互いがそれぞれの暮らしを大切にすることと意欲的に楽しく働くことが、見事に調和している。Hさんはいう。

「子どもも連れてきていいといわれるので、すっかり喜んで、結構、ふたをかぶせるとか、簡単な手伝いをしたり……。この前は、『今日は幼稚園よりトマトに行く』というし、大人が歌つてるというんです。『オバさん、歌うたいながら仕事したらあかん』って」

生産が始まってちょうど一年、素人集団で始めた野菜づくりも一回の収穫経験でしだいに要領をおぼえ、収穫時期や生協出荷独得のきびしさなども知

「昔から法事に使う檻や榊がここ特産。檻で兵庫、大阪などの市場中心に一億五〇〇〇万円ほどですが、これも、生協で、市場のように七〇cmにこだわらず、実際に必要な三〇cmの長さでいとなれば、もっとたくさん安く出すことができると思います」

竜神村の農民組合長であり、村会議員でもある吉本さんをはじめ、この村のリーダーたちが大阪の生協、消費者の人たちに寄せる思いはあつく切実である。

「よどがわ生協の新しくできたお店二つ。土曜、日曜も野菜を運べるようになると、農家はほんとうに助かります。夏場は三日ずれると青物は育ち過ぎますから、共同購入だけだと、つらいんですね……」

●顔の見える産直 安全・安心をこめて

紀ノ川農協の人たちが生協、都市生活者の要求にこたえ、顔の見える産直生産をするようになった変化について伝えよう。

「生協の皆さんのが、班をつくりまして、二〇人をメドに、生産者同士の班をつくりました。一つは同じ地域のことに学び、私たちは、地域行政ごとに、二〇人をメドに、生産者同士の班をつくりました。消費地と直接

り、これからいつそうひろく多様な都市消費者の要求に応える野菜づくりを研究開発しようと、パート女性たちも眼を輝かしている。子育てをし、労働をし、都会の消費者と仲よくできる——一つひとつが、今まで家庭内労働しか経験のなかつた彼女たちにとって、困難どころか、胸躍る人生初めての出会い、歓びを体験する毎日であることだけは間違いない。

●「村おこし調査」から 大阪の人と手をとりあい

「紀ノ川農協の人たちが自分たちが生きのびることだけを考えているのではないことは、竜神村五〇〇〇人の『村おこし調査』を、村役場竜神村農協、紀ノ川農協の三者が協同して実施したことを、とてもわかります。そして、竜神の主要産業である森林労働で働き、振動病になった農民たちの仕事をおことして、友好菜づくりをすすめ、しいたけ栽培も考え始めている。それがきっかけで八八年の夏は、大阪のみなみ生協の親と子が夏休みにきて、体験宿泊学習を実現しようとしています。村の小・中学校の先生方も協力して、竜神村の夏も、観光だけでなく大阪の人とのふれあいで、活気づくと思います」



ミカンづくりに熱意を燃やす

つながって生産できること。たとえば、川原地区班とよどがわ生協というふうに。同時に、農家同士の生活について語りあい、助けあい、地域のなかに農業をやめそうな家が出たら、みんなでどうするかを相談し、手をうつことができるようになります」

都市の消費者が隣近所で“班”をつくり、共同購入する生活協同のよさが、いま、農村の生産者同士が協同し、地域の視点で、生産・生活をみんなで考へ、つくる活動を育て、いま、紀ノ川農協の組合員を中心に、農村地域内の協同、大都市生活者との協同が、急速に発展し始めたということ。そのふれあいの基本を、地域内の“班”づきあいにおくこと。

川原班の一人、四〇代半ば、夫婦でミカン一筋の堂田美喜子さんが語る。

「おかげで農家が、隣の田にベンベン草がはえたら喜ぶ競争でなく、一緒に生産計画をたて、よどがわ生協の奥さんたちの顔を思い浮かべて力合わせるようになつて……。それに、大阪の奥さんが子どもをつれてミカン山に初めて登つて、どんなふうに手間ヒマかけて作るか見てもらおうよくなれて、ほんとうによかつたと……」

一呼吸おいてつけ足した。

「私たちも、奥さんたちも、これからも忙しい男たちも一緒に、夏の遊び、秋の収穫と季節ごとに都會にない自然の暮らしの楽しさを体験できる、産直の家づくり、ミカン一本経営者づくりの話になつていった。よりよい物と人、そして、楽しい人と人の協同づくりの話がかなならずおちになつた。

がい心を使って苦労している様子を、きつちり組合員の暮らしの現場にとどけなければいけないと強調する。そして、最年長六七歳でミカンづくりをつけた林愈さんの生協へのメッセージが胸を衝く。

「半日一緒に供給の車に乗せてもらつて、初めてなぜ、安全・安心な物を心こめて作らんといかんかが身にしみてわかりました。作りすぎたときに、よどがわ生協さんの職員、組合員の人達がひき売りしてさばいてくださる姿を見たとき、市場へ高い安いで物売るのとまつたく違うことがほんとうにわかります」

四〇歳そそこそ、奥さんがわかやま市民生協の組合員でもある戸根真次さんは、農協も生協も、これからは、おた

「紀ノ川農協の人たちが自分たちが生きのびることだけを考えているのではないことは、竜神村五〇〇〇人の『村おこし調査』を、村役場竜神村農協、紀ノ川農協の三者が協同して実施したことを、とてもわかります。そして、竜神の主要産業である森林労働で働き、振動病になった農民たちの仕事をおことして、友好菜づくりをすすめ、しいたけ栽培も考え始めている。それがきっかけで八八年の夏は、大阪のみなみ生協の親と子が夏休みにきて、体験宿泊学習を実現しようとしています。村の小・中学校の先生方も協力して、竜神村の夏も、観光だけでなく大阪の人とのふれあいで、活気づく思います」

以前から聞いていた、紀伊半島の秘境＝竜神村の人びとのふれあい、協同は、たしかに、半端な慈善心などではできない。なにしろ、紀ノ川流域、九度山の駅を出て、高野山に登り、昔修験者しか歩かなかつた尾根伝いに護摩壇山（二三七〇m）をこえ、高野竜神スカイラインを走りつづけ、谷間に下つて、ほぼ三時間費やして、やつと竜神村役場のある集落に到着するのだ。車には強いはずの私も、空腹のせども、観光だけない大阪の人とのふれあいで、活気づくと思いません」

にはいささか気分を悪くしたほどである。

帰りは濃霧で視界ゼロに近い状況にも出あい、この秘境＝竜神の農家が丹精こめて作った友好菜を、新鮮度を失わず、速やかに安全に、大阪の消費者に送り届けるだけで、どれほどの労力・運賃が必要か身にしみてわかった。しかも、ここの有料道路も往復四〇〇円の通行料をとる日本型雪融雪式道路。行政の貧困のかたちで、重くつらく、生産者・消費者の肩にかかる。

●いまさき・あけみ
島根県生まれ。早稲田大学大学院卒業。その後、作家活動へ。主な著書に「すてきな出会い」「暮らしと女と街づくり」(共編)



いとおしんで作つて いとおしんで食べる

○滋賀県・愛知中部農協の(農業好き)仲間づくり

小山乃里子

●上がり下がり 市場のもとで

なんかえらそうな顔した人たちがずらつと座つてはるなあとがめていると、そのうち一人の年配の人が、外を見て、「今日はさぶいし、もう畠やめとこか」と、となりに座つてゐる人についている。

「えー、寒いからやめるんですか?」と思わず聞くと、「昔みたいに、年がら年中やつとるんがよいわけではないんじやわ。あそぶつちゅうのはいかんけど、体のよう動くときにやる。作物もよう育つてくれる」ということばに、びっくりして、次にはうれしくなつてしまふ。

自然を相手にしている人は、自然に

が、そんなうまいこといくんやろか、そりやあかんてとついぶん考えたんやが」と、北村さんは、当時のことを、一言ずつかみしめるように話す。

「市場では、どうもみんながきばるような希望もないし、話聞くうちに、やっぱりこれからはこれや!」と思うて、決断したんやが」

●地域の農業を だれが立て直すか?

私の感覚としては、農協っていうのは、農民にお金貸して、農家がうまくいくように相談にのつたり援助したりするんやと思っていたが、「ノーリキヨーサン」に象徴されるように、いまや農協は、七~八割が貯金集めと共済事業。農協の職員は、ノルマを課せられ、貯金と共済勧誘に歩く。

「これではあかん。農協いうのは、農民が悩んでいるときにこそがんばらんと」と、農協で働く労働者たちが、農民組合と力を合わせて、農協にもはたらきかけ、生協との産直を中心、地域の農業のたて直しをよびかけた。

滋賀県農民組合事務局長の中川栄治さんは、「三年くらい前に、この地域に調査に入られた大学の先生らが、いちばんびっくりしたことは、農協が農民組合を通じてやることに、よう納得したことだつたんよ。それ可

日本列島すみすみ産直ネットワーク

ルポ

ここは、滋賀県東部・湖寺平野のまん中にある愛知町、秦荘町という穀倉地帯の農家、約二〇〇〇戸をかかる愛知中部農協。よどがわ市民生協とは、三年前からコープ近江米をはじめ、バレイショ、ナシ、白菜などの産直をすすめている。

この農協も、米作を中心として、昭和四〇年の減反まで、増産につぐ増産をすすめてきたが、全国的な例にもれず、都市化の波ともあいまって、専業農家は、農家戸数のわずか四パーセントにしかすぎず、第一種兼業農家(主として農業を収入源としている)が七パーセント、農業以外の収入を主にして、野菜部会長の北村惣一郎さん。



竹原のナシ園

●さびれるナシ園も 産直で立て直し

奥さん納得さすのんたいへんやったんちがいますか? と聞くと、「まあね、男は家に居て、家守らんとあかんいうてましたわ」

えー、おもしろい発想、男が家守るんやつて! しかし、納得できるなあ。

最後に、北村さんが、「共同でやつてると心配で……」

そして、活気のでてきた農村に、UTAーンしてきただけだ。

「自分は、八七年八月に勤めをやめて、百姓一本でやることにしました。見捨てられていく農業をだまつて見とれんかった。地域の農業にちつとも役に立つ人間にになりたいなあ思うて。それやと思う。日本人の食糧は、日本でいう人が圧倒的なんやから、消費者が望む安全でいいものつくるために努力したらやつていける思てます」と、きっぱりと語るのは、多賀町の西沢義雄さん。

農協を出て、一〇分ほど車で走ると、小高い丘がまつ白に見える。「あれが、かけ、長十郎ナシを生協に出荷したのが五年前のこと。「どうやろ、いまどき長十郎ナシなんか出るやろか」という香りがただよう。

このナシ園は、昔から「長十郎ナシ」の産地であつたが、二〇世紀を中心とした他産地に圧倒され、さびれる一方だった。観光ナシ園として、細々と維持してきたが、一〇年ほど前からビンチにおちり、ナタで自分のもつている木を切り倒す農家もでてきた。この話を聞いた県農業連絡書記長で、現在滋賀農民組合事務局次長の玉木庄治郎さんが、「どうや、生協にださんか、木で熟したほんまにおいしい、安心で生きるもんを待つてゐる人がいる」ともちかけ、長十郎ナシを生協に出荷したのが五年前のこと。「どうやろ、いまどき長十郎ナシなんか出るやろか」というだけや

あかん。せやから、クスリもようけ使わんならん。もう経営的にあかんようになって、一〇人くらいで一生懸命守つてきただけど、もう終わりか、こまつたことやなあ、とみんなでいうてた。そもそもかりだしてやると、次の日もつていたら三〇〇円になつてたちゅう具合。それに「べっぴんさん」やないと

あかん。せやから、クスリもようけ使わんならん。もう経営的にあかんようになって、一〇人くらいで一生懸命守つてきただけど、もう終わりか、こまつたことやなあ、とみんなでいうてた。そこへ、農民組合から、生協と産直やらんかと話があつて、決まつた量を決まつた値でとつてもらえるいうて。じや

滋賀県・愛知中部農協

ているという第一種兼業農家は八九パーセントになるという。

私自身、もとより農協や農民組合についてそう深い知識をもつてゐるわけではない。しかし、いま減反政策のなかで、日本の農業がつぶされ、アメリカからコメを輸入しようとしている。

牛肉やオレンジが安いからと、その安全性も無視して輸入されようとしている。

これはおかしい、日本人は日本で穫れるもので生きしていくべきだし、そういう世論が圧倒的であることは、先般の総理府世論調査でも明らかになつてゐる。いまですら輸入食品がほとんどのノーチェックで入つてきているの

に、これ以上増えたらどうなる!? といふてしまつたのだつた。

いう思いはあつたし、政府の「ノーポジ」にも、かねがねアタマにきていたから、食糧問題や生協の産直運動についても、強い関心をもつてた。

方は、野菜部会長の北村惣一郎さん。「昭和二三年から指定産地にされてやつてきた白菜づくりも、五年前くらいからだめになつてねえ。市場に出しても、値の上がり下がりがはげしくて、今日は一〇〇〇円やさかい、さあみんなできぱつてやろうかいうて、女子衆もかりだしてやると、次の日もつていたら三〇〇円になつてたちゅう具合。それに「べっぴんさん」やないと

あかん。せやから、クスリもようけ使わんならん。もう経営的にあかんようになって、一〇人くらいで一生懸命守つてきただけど、もう終わりか、こまつたことやなあ、とみんなでいうてた。そこへ、農民組合から、生協と産直やらんかと話があつて、決まつた量を決まつた値でとつてもらえるいうて。じや

滋賀農民組合事務局次長の玉木庄治郎さんが、「どうや、生協にださんか、木で熟したほんまにおいしい、安心で生きるもんを待つてゐる人がいる」ともちかけ、長十郎ナシを生協に出荷したのが五年前のこと。「どうやろ、いまどき長十郎ナシなんか出るやろか」というだけや

19

土づくり、人づくり、地域づくりの 産直運動

●大分県・下郷農協
一宮厚美

●土づくりから いい食べ物を

たとえ一本の人参であれ、一束のはうれん草であれ、農家のつくった生産物は農協で引き受けましょう、極大極小奇形のぞく土つきの無農薬野菜であれば農協で引き取りましょう、というまどきめずらしい農協が九州・大分にある。この農協は、化学肥料を使つたり、農薬で消毒をしていなければ、特別に形がおかしいもの以外、農家の生産物に責任を負う。

「みかけはよくないかもしれないが、味はいいもの、地力の保持と味覚、そして健康をあわせた食品ということを売つとるんです」

その土地で育つた野菜と同じように

つやのある眼の底を輝かせながら、農協の組合長はこう語った。この農協は下郷農協という。

菊池寛の小説で有名な大分県の「青の洞門」の近く、渓谷をさらに奥へはいった耶馬溪町にこの農協はある。人口六〇〇〇人、組合員四〇〇人のそれほど大きいとはいえない農協だが、その気迫はたぶん日本でも有数の地位をしめる。組合長の奥登さんは六〇代の半ば、その半生を農業と地域づくり、産直運動にうちこんできた人だ。いうこと一つひとつに信念のようなものがある。

されていた紫かぶをみて「りっぱな野菜があるじやないか」と言つたという。このようなユーモアにあふれたエピソードのなかで、牛乳を運ぶついでに野菜やワラビを運び、また肉を運ぶといふかたちで、産直運動は進行し、ひろがりをもつてきた。

いまこの農協には有機野菜の生産組合と研究会がある。およそ一五〇人の婦人を中心とした組織だ。そこでは、五アール以上の農地をもつ人はごぼうとキヤベツと白菜を責任をもつてつくる。五アール以下の人はなにを出荷しないのか」という注文がきはじめた。

「野菜はそれほどない」と答えると、産地見学に訪れた消費者が、牛の餌に

のにはかわりがないんじやから

下郷農協では、産直運動はこうした土づくりの思想とかたく結びついてすめられている。

下郷農協のその産直のルーツをたどっていくと牛乳にぶつかる。その牛乳の名はいまも「労農牛乳」。労農同盟にひっかけた名だ。思えば、産直とは都市の労働者と農村の農民とのあいだの直結を意味するから、労と農の結びつ

●その名も「労農牛乳」 に産直のルーツ

下郷農協・奥組合長

てもよい。だが、そのかわりに五アール以上の農家よりも後で出荷する。両グループのバランスと協力がこのようにしてとられる。

「農業というのは絶対一人ではできませんよ。たとえ水がひかれ、道路があり、電気がとおり、機械が備わっていても、地域全体の集団がなければ、農業は絶対できないのです」

奥組合長は産直をささえる農村の側の事情を一言でこう語った。たしかにそうだろう。農業はひとりではやれない。戦前の農村では、一年三六五日のうちにおよそ一〇〇日は田植え、稲刈り、河川や道路の普請、寄り合いなど、共同の営みのなかにあったという。現代は農業生産力の発展もあって、そこまでの共同の必要はないだろう。だが、集落を単位にした見える共同、見えない共同の大切さは依然としてなくなつてはいない。下郷農協はこの見える共同の必要はないだろう。だが、集落を単位にした見える共同、見えない共同を農協経営のあり方のなかに生かそうとする。

いま農業は食糧をつくるだけではなく、地域をそだないと守れない。一



●嫁さんの きたくなるような 村づくり

集落を単位にした見える共同、見えない共同の大切さは依然としてなくなつてはいない。下郷農協はこの見える共同の必要はないだろう。だが、集落を単位にした見える共同、見えない共同を農協経営のあり方のなかに生かそうとする。

いま農業は食糧をつくるだけではなく、地域をそだないと守れない。一

実際、下郷では青年のほか、すでに八五人の農家の主婦たちが食肉工場で働いていた。「牛乳、肥育、堆肥とつづいて野菜につながる。牛から乳がでて牛肉がついてくる、そして農産加工品がうまれて、專業も兼業もそれぞれの分野で収益をあげていくことですよ。



下郷農協・奥組合長

たがいにもちあつていくわけです」と
奥さんは説明した。

たがいにもちあつていくわけです」と
奥さんは説明した。

有機農業とはたんに化学薬品を使用しない農業という意味だけはあるまい。それも重要だが、有機農業(Organic Agriculture)は農業生産物が一つ

農民団体、下郷よりはるか西方、雲仙の麓に位置する南高農民組合（八二年）当時、七名で結成し、生協と産直を中心現在五〇名と急拡大中の組合長荒木弘光さんも同じようなことを言つた。



頭をもたげ、背を伸ばすようにしておよそ1ヶ月、エノキ茸はこうして育っていく。



山の頂、エノキ茸を育てる工場を正面からみると



調整された温湿度、人の眼と手のなかで育つ

「意識ある消費者に
という気持ちが、正
ね。だからいま生協
の人たちが仲間を増
期待するんですよ」

「意識ある消費者にしか売りたくない」という気持ちが、正直いってありますね。だからいま生協で産直をやっている人たちが仲間を増やしてくれるので、期待するんですよ」

一九四七年愛媛県生まれ。
京都大学大学院を卒業。現
在大阪外国语大学助教授。
主な著書に「生協運動の新
時代」(共編)「生活と地域を
つくりかえる」「日本経済と
危機管理論」「暮らしと女と
街づくり」(共編)がある。

その意味からすると、産直運動はたんに食糧の需給をつうじた都市と農村の共同ということだけではない。都市部では生協を単位にした生活者の「顔の見えあう人間関係」が、農村部では農協や農民組合のなかの生産者相互の「手間をかけあう共働の関係」が産直をささえる。産直は都市のなかの生活者の地域づくり、農村での生産者の地域づくり運動でもあり、両者の架け橋でもある。

有機農業とはたんに化学薬品を使用しない農業という意味だけではあるまい。それも重要だが、有機農業(Organic Agriculture)は農業生産物が一つの有機的連関のなかでうみだされてくること、そして現代では、生活者と生産者がまさに有機的組織的（オーガニック）に結びつく関係にあることも意味しよう。

「農家のやる気」の源泉を奥組合長は、「つくりたるもののがスムーズに売れていけば、農家にやる気はでてくる、簡単なことです」と簡潔に語ったが、このさりげない言葉のなかには、有機農業をささえる後継者とその意欲をうみだす点でも産直は大きな役割をはたすことが示唆されている。

農民団体、下郷よりはるか西方、雲仙の麓に位置する南高農民組合（八一年）当時、七名で結成し、生協と産直を中心現在五〇名と急拡大中の組合長荒木弘光さんも同じようなことを言つた。

「農業というのはやつぱり人を育てることですよ。いま地域を変える心意気のなかとば、農業は守れんとですけんね。地域や社会をなんとか変えるという意気込みのなかとば、農業と私たち暮らしはやれんとですよ。その点で、都市の消費者と私たち農家がたがいに知り合い、顔のみえあう関係にあることが大きな励みになつとることですよ」

ヤマを逆手にとひて
木と竹から
食べ物をつくりだす

耶馬溪町は農村というよりは山村である。その昔、といつてもまだ一、二〇年前の話だが、「狐にだまされるような山林」といわれたほど、この地は荒れた雑木におおわれた山地であった。開拓から整地がすすんでも、山林が一万五〇〇〇ヘクタールにたいして、耕地面積はわずか二三〇ヘクタールにすぎない。山林をどう生かすか、もてあましげみの土地をどう活用するか、これは町全体にとつて知恵のしば

「いまはもてあましている山の材木と竹を使って食べ物にまで變えていけないか。といつても、食べ物は腕をくんでいて出てくるわけじやない。その試しに取り組んだのがエノキ茸です」
エノキ茸はおがくずのなかで育てられる。そのおがくずは山林から切り出された木材を乾かせ、みじんに粉碎されれたものをしばらく寝かせ、適度に発酵させたものが使用される。瓶詰めされたおがくずのなかに菌が植え付けら

● いいものを
すべて食べる食生活

奥組合長は消費者の食生活にたいし
ても、いうべきことはいう。
「そりやあ立派に食べなければならん
ですよ。全部食べなければならん、き
るんですかね」
白髪の目だちはじめた不精髭のなか
に、がむしやらに追求する攻めの眼が
若々しい光をおびた。



直営の工場から生まれた農産加工の品々

「針葉樹林は間伐をやらないと美林はできんのですよ。間伐していい木を育てながら、木を生かして食い物をつくつる。それにこんどは、エノキ茸を育てる。た後のおがくずの始末をなんとかしたうみだされるのはエノキ茸ばかりではない。地域にはそれにともなつて雇用がうまれてくるのである。「エノキ茸工場」には立派な専門家といつてよい青年が働いていた。

なま木が食べ物に変えられる過程で、適当な温度と湿度の保たれた倉庫のなかでエノキ茸は競つて瓶をはみだすように育つていく。

いいものを すべて食べる食生活

奥組合長は消費者の食生活にたいしても、いうべきことはいう。「そりやあ立派に食べなければならんですよ。全部食べなければならん、き

ちゃんと食べてもらいたいのですよ。上も捨てて下も捨ててまんなかを少し食べてポイと捨てるのではなくてね。そのかわりいいものを食べること、いいものをするべて食べるということですよ」東京ではいま一日に一〇〇万食分の「定食」にはほど遠い。ダイエット・ブームとかで、その種の本には「定食を食べるときにはご飯を残して食べましょ」とか「フライはコロモをとつて食べましょう」とかの文句がならべたてられている。この時勢のなかで、あたりまえといえばそのとおりの「いいものを全部食べる」という奥さんの言葉がやたら新鮮に響いた。

「意識ある消費者にしか売りたくないという気持ちが、正直いってありますね。だからいま生協で産直をやっている人たちが仲間を増やしてくれるのに期待するんですよ」

産直とは、奥組合長のいう生産者と消費者のあいだのこうした期待、そして互いの信頼と協力、これらがトライアングルになつたところですすむのであろう。

●にのみや・あつみ
一九四七年愛媛県生まれ。
京都大学大学院を卒業。現
在大阪外国语大学助教授。
主な著書に「生協運動の新時代」(共編)「生活と地域をつくりかえる」「日本経済と危機管理論」「暮らしと女と街づくり」(共編)がある。

パイソン自由化の大波のもとで

◎レポート・沖縄から

ハヤシ・わざわひ 中心の沖縄農業

亜熱帯地域にある全国ではただ一つの県、沖縄県の農業は、他の地域では作れない、さとうきびやパインなどを栽培し、日本農業のなかでも地域の特性をいかした農業として、大きく発展できる可能性をひめています。

だが、いますすめられている農畜産物の市場開放・輸入自由化など自民党政のもとで、この可能性も裏目に出ています。さとうきびやパインの栽培は、市場開放で外国産との競合など、農業つぶしの悪政の影響をもろに受けた結果となっています。

さとうきび代のすえ置きや切り下げ、円高によるパイン産業の危機、長期にわたる畜産物生産者価格の低迷な

ど、きわめてきびしい状況に追いこまれています。

冬場の野菜や花卉の出荷など 復帰後に急速に伸びたのもあります。が、これも手放しには安心できません。一九八五年の「カボチャ」価格が、メキシコやニュージーランドからの輸入で大暴落、農家がひどい目にあわされました。そういうことが二度とおこらないという保障は、いまの自民党の政治のものではありません。

農業は米、麦、大豆など穀物生産や酪農など大家畜の生産をやめ、野菜・草花・果樹・小家畜だけにするよう述べています。また一九八六年四月、中曾根総理は「国際協調のための経済構造調整研究会」の報告（前川レポート）を実行するとレーベン米大統領に約束しています。この報告書は、農産物の市場開放をいつそ大規模にすすめるとしています。

的なものとなっています。
このような農業つぶしの
に対応して、私たち農民は
とかたく団結し、また労働
人びとや消費者とも協力し
農業とくらしを守る運動
げ、ひろげなければなりません
沖縄農業は全般的にたい
い状況にあります、とり
い自由化が決まつたパイン間
いと思います。

長時間労働や低賃金で労働者を犠牲に、大手企業や大資本が安い品物をつくり、アメリカやヨーロッパに安く売りとばし、相手の国にたいへんな迷惑をかけています。それが、いま国際的に問題となっている貿易摩擦です。その解決のためと称して、自民党政権は農畜産物の輸入自由化、市場開放、円高政策をとり、こんどは沖縄のパイン産業など、日本の農業と農民を犠牲に切りぬけようとしています。

かかえ、本土側代理店（大手総合輸入商社）からは、缶詰の値下げを要求され、それを受け入れるなどきびしい状況に追いこまれています。

一九八一年に農林水産大臣の認可をうけて沖縄県果樹農業振興計画のなかで、パインの生産計画も策定されました。が、一九九五年を目標年度に、パインの栽培面積は四五〇〇ヘクタール、生産量は一〇万㌧の目標にたいして、途中の一九八五年の達成率は栽培面積・生

こうした財界や政府のうごきのなかで、いまアメリカから国民の主食であり、生産調整まとしているコメの輸入自由化まで強引に要求されています。また、一月二八日に農政審議会が農林水産大臣に答申した「二十一世紀へ向けての農政の基本方向」は農業のもつ国民的・社会的役割を放棄する反動

●輸入自由化が決まつたパイン
パインアップルは沖縄県の特産作物、沖縄でしか作れない国民の貴重な資源です。復帰直後までは、全国のパイン缶詰の供給量の七〇%以上を沖縄県で生産していました。それが一九七五年の冷凍パインの輸入自由化で大打撃、冷凍パインから製造されたパイン缶詰が全國の市場にでまわり、県産缶詰の供給比率はついに三〇%台にがた落ちです。それに追い打ちをかけたのが、貿易黒字ベラしを口実にした円高政策と関税引き下げ、それにパイン果汁の輸入枠拡大や自由化などで、沖縄県のパイン産業は崩壊の危機に追い込まれています。

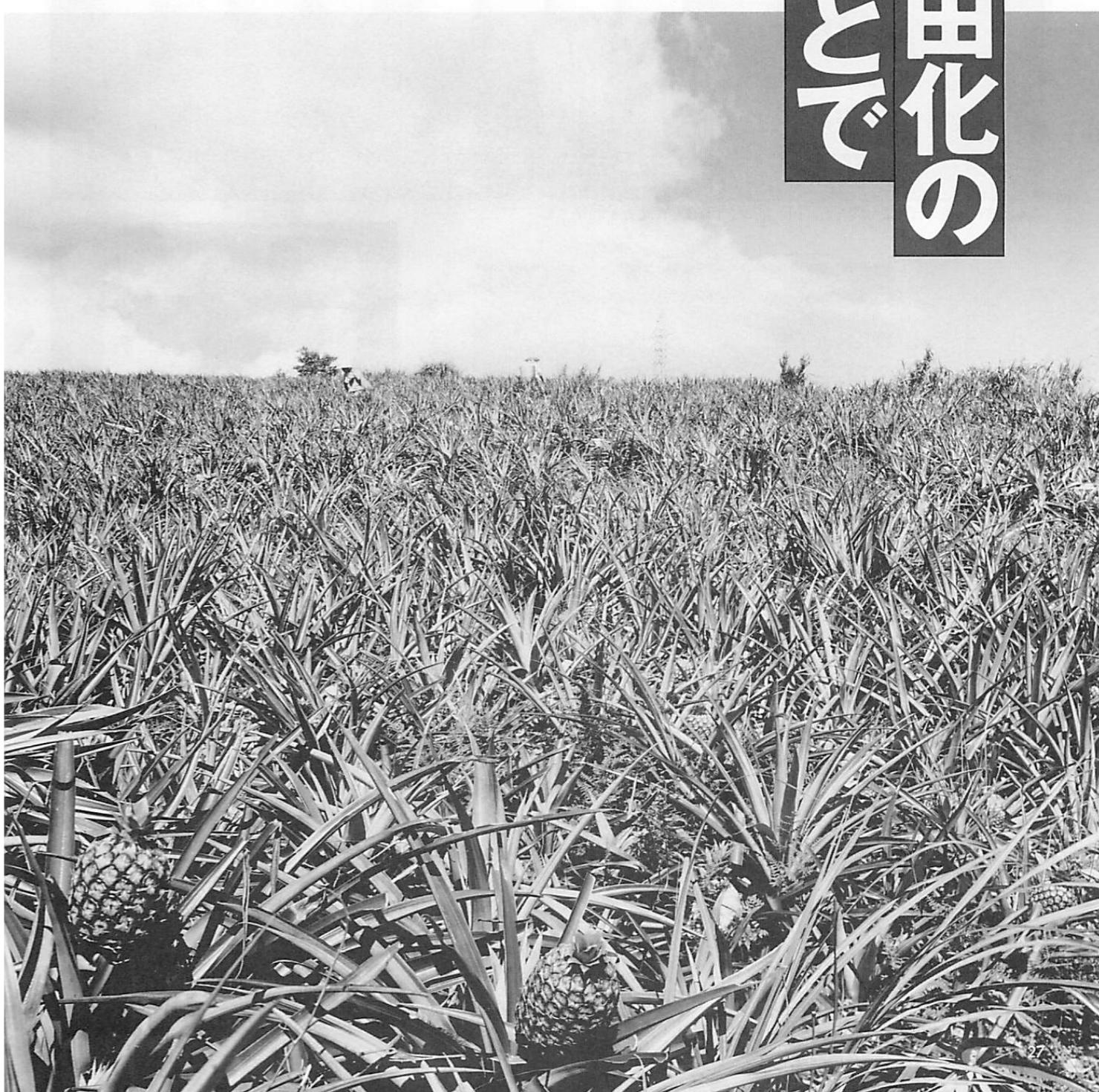
長時間労働や低賃金で労働者を犠牲に、大手企業や大資本が安い品物をつくり、アメリカやヨーロッパに安く売りとばし、相手の国にたいへんな迷惑をかけています。それが、いま国際的に問題となっている貿易摩擦です。その解決のためと称して、自民党政府は農畜産物の輸入自由化、市場開放、円高政策をとり、こんどは沖縄のパイン産業など、日本の農業と農民を犠牲に切りぬけようとしています。

かかえ、本土側代理店（大手総合輸入商社）からは、缶詰の値下げを要求され、それを受け入れるなどきびしい状況に追いこまれています。

一九八一年に農林水産大臣の認可をうけて沖縄県果樹農業振興計画のなかで、パインの生産計画も策定されました。が、一九九五年を目標年度に、パインの栽培面積は四五〇〇ヘクタール、生産量は一〇万㌧の目標にたいして、途中の一九八五年の達成率は栽培面積・生産量とも半分以下となつており、一九八〇年度の実績にもおびません。完全に破たんしたことを示しています。

ところが、自民党政府は一九八七年二月七日付けて、「果樹農業振興基本方針の公表について」を農林水産大臣名で発表しました。その内容は「諸外国から我が国に対する果実等の輸入拡大の要請がますます強まる」などの理由をあげ、パインの生産計画を見直し、栽培面積三一〇〇ヘクタール、生産量は六万五〇〇〇㌧に大幅な計画変更をしました。

アメリカやヨーロッパでも、自分の国農業を保護するために特別に措置をとっているのは常識。それを外国のいいなりに農畜産物の輸入をふやし、農業をつぶす自民党政はゆるせません。



どうする日本の 農業・食・暮らし

秋田は田沢湖の南部に唄われる生保内節。

「吹けや おぼね(生保内) だし、七日も八日も 吹けば宝風 イネ実る」

この民謡は、まだ農薬の使われなかつた昔、だし(東風)が害虫をふきとばす宝風になって豊作をよぶ、と願つた農民の心をうたつた。農民の願いは自然の力を生かす農業の知恵のありかをも示す。いまこうした農の知恵と文化を現代にどう生かすか。

技術の伝承がとだえてしまつたら、民族は生き延びることが出来ないんじやないですか。

工業はもう、これ以上発展しなくていいと私は思っています。あとは兵器なんかを作るだけですから。人間が社会で普通に生きていくために必要なものを、適正なねだんで作ってくれれば十分なんですよ。

消費者の価値観も、おかしくなってきてるんじゃないでしょうか。車が上で米が下のように考へている。ほんとうは、農産物こそ人間が生きていくため大事にしなきやいけないもののはず

農民はエンジニア

増田れい子



ルポ 日本列島産直ネットワーク

国民党政府が、一九八八年二月二日のガット（関税貿易一般協定）理事会で農産物自由化一〇品目を受け入れたために、いま沖縄のパイン産業は崩壊の危機にさらされています。

パインは全国にはこる沖縄の特産品。本島北部や八重山の地域農業をささえる柱です。生産農家や缶詰加工業、関連産業をふくめ県民約二万人がパイン産業にかかわっていますから、自由化は、これらの農民や労働者の生活をおびやかし、雇用など県経済に大きな打撃を与えることは確実です。

沖縄では自由化の動きに機敏に反応して、一月八日に一万三〇〇〇人もの県民大会を開催し、自由化阻止の要請を重ねてきました。にもかかわらず、農民の総意を無視、自由化されたのは心から憤りをおぼえると、中央会会長は談話を発表しました。

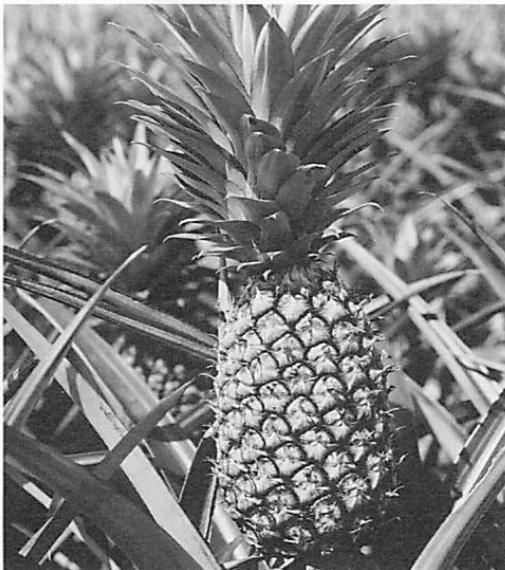
「衝撃はパイン産地を走った。北部のパイン生産農家は、強酸性の耕地では他の作物に転換することもできない。自由化は政府の経済政策のミスから生じたもの、政府はその責任をとるべきだ」と訴え、「アメリカの横暴を許すな!」「アメリカは基地を持ち帰れ」とパイナップルの主産地・東村では横断

幕で反米感情を引き出しにしました。「パイン栽培を奨励したのはほかなりぬアメリカ、基地にも、われわれは協力してきた。それなのに自由化しろとは……」「身勝手すぎる」

三〇年前、当時の米民政府の指導により、丘陵を開こんしました。それはPH4前後という強酸性の赤土のため、荒地に強いサトウキビさえ育たず、おまけに傾斜地で、パインしか栽培できない地理的・土壤的・台風に強い気象的条件にかなつたからだつたのです。最後の望みがパインでした。そうした切羽詰まつた思いが、基地問題に一石を投じたのです。

次はパイン以上に内外価格差が大きいサトウキビ、さらに牛肉もやられるに違いない、沖縄農業が全滅しかねないという危機感が、県民総決起大会では、パイン農家以外の人たちもを参加させたのです。

パインは植え付けから二年後に収穫



内や主食である二つの自由化にまで道を開くものであり、重大です。政府は粉乳・練乳・でんぶんについては、当面輸入制限を継続し、他品目については、当打撃を与えない対策をとるなどといつて農民の怒りをなくそうとしていますが、これは大豆をはじめこれまで自由化された多くの農産物が壊滅的打撃を受け入れた以上せいぜい安樂死をはかるという程度のものにすぎません。

政府の国内対策は、パインについては財政補てん措置をとる方針が固まつたようですが、関税引き上げなどの国境措置が困難である以上、補助金などによる補てん措置では、その時々の財政事情に左右され安定性を欠きます。自由化の実施時期はできるだけ先送りしても、国の具体的対策が急がれます。そうでないとパイン産業は亡びるだけでしょう。

われわれ農民の生活を守り、国の農業を守り発展させるには、農民と消費者・労働者の連帯に依拠し、農業と食糧を守るたたかいの発展に全力をあげなければなりません。

でしょう。食べ物は自分で作る。これが原則だと思います。それができて初めて、人間は自立できるんですから。でも現代人は、花のつくり方さえ忘れています。だからせめて、自分の住んでいた地域の農業を残して、技術力をもつた農民の人たちを大事にしていきたいんですよ。地域の人の安全は、軍隊ではなく農業によって守られるべきだと 思います。

● いけはら・ひであき
一九四三年沖縄県沖縄市生まれ
一九六一年より沖縄市議会議員

一九二九年東京生まれ。一九五三年東京大学文学部国文学科卒。同年毎日新聞社（東京本社編集局社説部）入社。現在、「女のしんぶん」編集長兼論説委員（女性・文化）昭和59年度日本記者クラブ賞受賞。

A black and white portrait of a woman with short, dark hair styled in a flat-top. She is wearing round-rimmed glasses and a light-colored collared shirt. She is smiling warmly at the camera.

にもどれる。そんな社会といつもどつて、せめて自分の食事は作れるようになりたい

農業つていうのは、共同営農で女も年寄りも子どもも、さらには牛や馬、動物までが一緒にやれる実に絶妙な連帯産業なんですよね。農業に定年はありません。年老いたサラリーマン

でしょう。食べ物は自分で作る。これが原則だと思います。それがてきて初めて、人間は自立できるんですから。でも現代人は、花のつくり方さえ忘れていました。だからせめて、自分の住んでいた地域の農業を残して、技術力をもつた農民の人たちを大事にしていきたいんですよ。地域の人の安全は、軍隊ではなく農業によって守られるべきだと思ひます。

0

「農」の視点から行動を

渋谷定輔

「農」を通して宇宙を見るという発想を言いつけて生き、死ぬことを考へているんです。

現代では農というと、農業、農学、農村、農民などさまざまな学問や専門分野に分化されてしまっているでしょう。そこでは概念的な体系に人間がロボット化され、価値づけられてしまふ。しかし私の「農」の視点は、人間の生死とはなにか、文化・思想とは何かという原点から世の中のすべてを考えることなんです。

生命と自然と社会的人間の全体性をもつた視点で、自然的なものと知的なものの接点を確認していくことが、いま必要なんではないでしょうか。きれいな空気、水、太陽。そういうものとともに人間の存在 자체がある。自然の循環体系のなかで、宇宙的規模ですべての生命全体を見通していく視野をもつた視点で、生きることが置かれます。

詩集『野良に叫ぶ』から始まって、小作農民として生きてきた八十年の人生を語つてゐるんです。数年前に畑のなかにできた団地の子どもたちですよ。農業のことなどまったく知りません。それでも、六十数年前の小作争議の話を理解して、いまの自分の立場と結びつけ、不正にたいして黙つていてはいけないと作文に熱い思いを書いてくれるんですね。

現代という時代は、「農」の視点をだれもが持ち、価値を転換できる時代に来到しているんだと思います。知識はある。技術もある。人もいる。「場」もあり、機動力もある。いまの日本なら、性別や世代をこえた対等の

立場で、自然的・社会的創造力が生まれ出す「生命感覚の響きあい」が可能なことですよ。

そうして生命を大切にする対極に、知の集積である科学や技術があるんですね。専門化はすすめばすすむほど、肝心な一人ひとりの生きた人間が分断され、真実に生きることが置き去りにされてしまう。現代はそれが核兵器というような人類を死滅させるものまで産み出した極限にきてるんだと思うんです。

私は数年前から、自分の生まれた埼玉県富士見市を中心に、小・中・高生を相手に特別授業で話しています。埼玉県富士見市を中心には、小・中・高校生を相手に特別授業で話しています。

埼玉県富士見市を中心には、小・中・高校生を相手に特別授業で話しています。

一人ひとりができることから始めればいい。農民ならばほんとうに安全な食べ物を作つて、それをつづけていく経済的保障を要求していかばい。現代の状況の波にひきずられてはいけない。私たち日本人の一人ひとりが専門分化された不自然な人間ではなく、丸ごとの生命力に満ちた人間、「生活者として自立し、結びあつていく」とから始めようではないですか。(談)

食糧自給、JNC国是である

亀田得治

一九八〇年(昭五五)四月八日に、衆議院本会議は、「食糧自給に関する決議」をおこない、「……先進諸国に較べ低位にあるわが国の食糧自給力の向上を図り、国民食糧を安定的に供給することは、まさに国政上の基本的且つ緊急の課題」と断言しました。この決議は、当時の国民の世論を背景にして、全員一致で可決されたものであります。それは、國の基本方針・國是で

ところが、一九八四年(昭五九)九月、中曾根内閣のときに、日米諮問委員会(委員は政府に好都合の人物)は、「日本は食糧自給に努力するのである。技術も物もある。人もいる。「場」もあり、機動力もある。いまの日本なら、性別や世代をこえた対等の人間のため心をこめて作り、みんな

●しぶや・ていすけ
一九〇五年埼玉県生まれ。独学。
入獄・闘病など。現在は思想の科
学研究会理事。五人会代表。詩集
「野良に叫ぶ」(七ヵ国語翻訳「農
民哀史」から六十年「若
波新書「シェフ・エンコ詩集」共
訳など)。



にさらされるようになりました。われわれは、八〇年の国会決議の原点に立ちもどつて、根本的に考え直さねばなりません。

先進国は、食糧不足国にたいし、緊急の食糧援助と同時に、農業生産力を持ち、食べる権利を持っています。すべての国が食糧を自給できるようになります。世界平和のために役立つことは明らかであります。

地球上のすべての人びとは、生存権を持ち、食べる権利を持っています。すべての国が食糧を自給できるようになります。世界平和のために役立つことは明らかであります。

先進国は、食糧不足国にたいし、緊急の食糧援助と同時に、農業生産力を持ち、食べる権利を持っています。すべての国が食糧を自給できるようになります。世界平和のために役立つことは明らかであります。

地球上のすべての人びとは、生存権を持ち、食べる権利を持っています。すべての国が食糧を自給できるようになります

どうする日本の農業・食・暮らし

い生活に合つたやり方があると思うんです。要は、ごちそとは手間をかけないこと。それに気づけば、日本の気きやさやシャブシャブを作るには和牛が最高なんぢやないですか。

料理に使う素材は少し高くて、安心でほんとうにおいしいものを選びたいですね。そういう点で私は、日本に依拠した国内市場の拡大をはかる

ふれているのですから、これを利用しない手はありません。野菜以外の例を一つだけあげれば、いま問題になつてゐる牛肉だつて、日本人の大好きなさきやさやシャブシャブを作るには和牛

が最高なんぢやないですか。

料理に使う素材は少し高くて、安心でほんとうにおいしいものを選びたいですね。そういう点で私は、日本

季にあつたおいしい旬の農産物があつて、それに気づけば、日本の気きやさやシャブシャブを作るには和牛が最高なんぢやないですか。

料理に使う素材は少し高くて、安心でほんとうにおいしいものを選びたいですね。そういう点で私は、日本

なぜ「産直」が期待されていいのか

宮村光重

全国各地で取り組まれている生協の「産直」は、現在、ますます広がろうとしています。よどがわ生協の実践も、すいぶんと蓄えられ、今後に向けた組合員の努力がつづけられているところでしょう。

こうした生協「産直」の発展経過をふりかえってみると、どうしても、それには大きな根拠があつて取り組まれている、と考えなければならないと思います。

第一の課題は、前回の一九八四年の日米農産物交渉では輸入枠拡大で日本に妥協したアメリカが、今回はまったく非妥協的なのはなぜか、という問題です。前回と今回の間に横たわる決定的な相違は、一九八六年の衆院同日選挙における自民党の大勝であり、農村から都市への集票基盤のシフトです。アメリカとしては、もうどれだけ日本の農業農村をたいても日本の政権党は安泰と踏んだわけですから。そのような驕りに歯止めをかけるには、日本国内で自由化を押します。そのため日本は、政治勢力にたいし、都市部でチエックをかけることが決定的に重要な問題となってきたといえます。

第二の課題は、農産物自由化要求の枕言葉に、「貿易黒字大国の日本」ということがかならず使われる点です。ガットの場で世界のどの国も日本の農業が憎いからではなく、世界中から貿易黒字を稼ぎまくる日本の方への批判があるからです。自由化圧力の根を断つには、自由化問題の真の主役である貿易黒字を解消する必要があります。そして、このような外に向けるには、国民の生活と購買力の向上

人はもつと「食」に貪欲になつてほしいと思います。(談)



●むらかみ・あき
一九二七年東京生まれ。料理研究家。新聞雑誌、和風の家庭料理を紹介している。近著「家の光協会野菜料理」中央公論社「わが家のおそうじ」グラフ社「花嫁料理レッスン」他

動をおこしていかなければ、なぜ食べ物が安全にならないのか、そこに根本的な問題があります。

心配な食べ物のなかに、輸入食糧があることは、みなさんの指摘されるところです。いまみたいに、輸入に頼り過ぎてはダメです。となれば輸入への過度の依存が、なぜおきてきたのか、そこを正すことが求められるでしょう。

加工食品に用いられる化学合成の添加物も重要な問題です。これにたいしても、今日の食生活を保つには、食品添加物が欠かせない、といわれます。しかし、それが多いより、少ないほうがやっぽりよいわけですから、減らす方向にもつていかねばなりません。これは、厚生省や食品メーカーのいうままにしていたのでは、まったく期待できないでしょう。

「産直」は、ほかにも、日本と各地域の食文化をめちゃくちやにする流れに沿うにちがいありません。また、地域経済の落ち込みをなんとかしたいという志向もあります。

農産物自由化の力ギをにぎるのは

田代洋一

日本農業を丸はだかにする自由化作戦が内外から着々とすすめられています。

の加工食品にとびつかざるを得ないのです。だから労働時間の短縮こそが、日本の国内農産物への需要を高め、日本農業を発展させる前提条件だといえます。



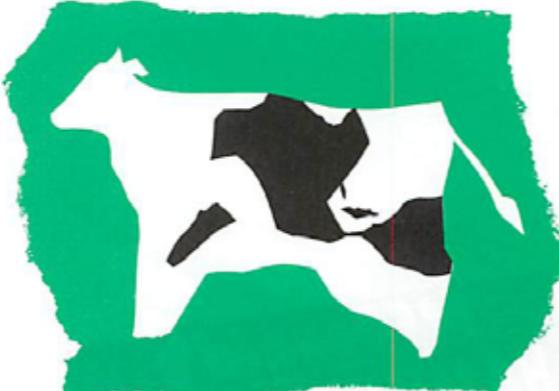
●たしろ・よしじ
一九二六年東京生まれ。東京大学農学部卒業。現在日本女子大教授。主な著書に「国民生活における農業・食糧問題」、「農業問題と国民生活」、「農産物物流と国民生活」、「農協・生協と国民生活」(筑波書房)がある。



こうして、「産直」の背景や根拠をいろいろと考えながら、いつそう発展させたいものだ、と思っているところです。

いのち育む農業に

河相一成



農業生産の主な役割は、人間がいろいろな活動をおこなう上で不可欠な食糧を供給することにあることは言うまでもないだろう。つまり、人間のエネルギーの源を作り出すのが農業生産だということを意味する。

そういう意味をもつ農業生産を、経済合理性(生産性)という物さしだけ測ることはできない。人間が人間らしい食生活を営むことができる生産

内での農業生産をやめて、外国から輸入すればいいだろう。あるいは、食品産業が内容不明の原材料に添加物をタブリ混ぜた画一的な加工食品を生産し供給すればいい、ということにもなる。

しかし、生命の源となり、生命を育み、人間の活動のもつとも重要なエネルギー源となり、さらには人間の文化的創造とも密接に関連がある、食糧・農業は、それを「だれが」「どのような」に作り供給するのかを「知ることにより、消費と生産の関係を人間らしくきくことになる。そして、そのこ

とが消費する側に、より健康で人間らしい食糧・農業のあり方を「考える」

キッカケを与えてくれ、ますます、生産と消費の間に人間らしいキズナをつくり上げることができる。

規模拡大だ、低コストだ、貿易自由化だ、と呼びづける農政や農業理論は、こういう人間のキズナを「一つひとつ断ち切り、人間に、ただエサを与えるばかり」ということに通じるのではない。か。

どうする日本の農業・食・暮らし

農業破壊を許さず 共に手を携えて

小林節夫

いま日本農業は文字通りの危急存亡のときです。結論からいえば、この危機はアメリカの食糧による対日支配の仕上げをねらう政策——食糧戦略によるものです。

昭和三〇年代、アメリカは日本に小麦を売り込むために、「米を食べれば頭が悪くなる」という大宣伝を、キッチンカー（小麦を使った料理講習車）を全国に走らせ、学校給食にパン食を突破口として輸入食品をふやし、昭和四〇年代には、「日本人の胃袋を変えた」と凱歌の祝賀会を農林省の高官を呼んで開きました。

いま日本の子どもをターゲットに「特定輸出助成計画」（T計画）で五年間に千数百億円の宣伝費をかけて牛肉などの大宣伝をしています。最近、多くの国民の関心をよんではいる輸入食品・食糧の安全性の問題は、こういうシャニムニの輸出攻勢によって検査体制と規準、規制が大幅に緩和された結果です。

財界は農産物輸入自由化で労働者の質上げの要求をそらし、抑え込むために、自ら一六ページの色刷りパンフで農産物輸入の大宣伝をし、新行革審や農政審議会は、この秋には食



●かわい・かずしき

一九三二年神奈川県生まれ。東北大経済学部卒。農学博士。東北大農学部教授。著書に「危機における日本農政の展開」「食卓から見た日本の食糧」「食糧政策と食管制度」など。

日本の農業をそのようにしてはならない。

制度の解体（米の部分管理、間接統制）を打ち出す予定で、その意気込みにはすさまじいものがあります。

私たちには日本農業を守ることは、日本の独立、国民の食糧・健康を守ることとまったく一つの問題だと考えて

います。それだけに、安全で安心できる食べもの、新鮮でほんものの味、旬の味を消費者に届けることは非常に大切だと考え、産直や朝市・地場流通や学校給食など真剣にとり組んでいます。

しかし、一方で「国際産直」と称し

ているところも出ています。日本から韓国に食品を輸出するときでさえ、

私たちが決して使わない薬品を使っているのです。食料輸出というものの宿命です。ましてや胃袋をかえられ、自分で農業をつぶしておいて、なんて「産直」といえるでしょう。

安ければ輸入しろというのは、円高で高賃金国になつたから、工場を海外へ移せという産業空洞化と同じではないでしょうか。私たち消費者と団結して食糧・農業・健康を守るために全

力をあげる決意です。

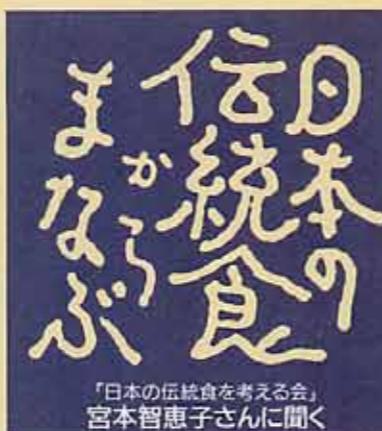


●こはやし・せつお

一九二五年、長野県佐久市生まれ。現在、農業運動の先頭に立ち、農

産物自由化阻止のたたかいに日夜日本列島をかけめぐっている

「われわれも人間、幸福に生きる権利がある」と消費者・労働者との連帯を呼びかけている。農民運動全国懇代表常任会議代表。



新しい素材を加えて
近代的な伝統食を

——なぜいま、日本型食生活なのかと
いうことです。
宮本 ひとことでいつて、健康を守ることと国を大切にすること、これらがおびやかされている状況だからといふことです。健康というのは、栄養と安全性、国を大切にすることの、食糧自給と日本の食文化の問題です。

日本型食生活が大切だということは、國も企業も、そして私たちもいつてゐるわけだけど、二者の視点はまったくがう。国は国際間のとりきめ、つまりアメリカからのおしつけに絶対服従しながらの日本型食生活であり、企業はもちろん「もうつけ」ね。私たちは消費者生協としての視点をしっかりとることが大切ですね。

——日本型の食事、伝統食とはどん

新しい素材を加えて

——なぜいま、日本型食生活なのかと
いうことです。
宮本 ひとことでいつて、健康を守ることと国を大切にすること、これらがおびやかされている状況だからといふことです。健康というのは、栄養と安全性、国を大切にすることの、食糧自給と日本の食文化の問題です。

日本型食生活が大切だということは、國も企業も、そして私たちもいつてゐるわけだけど、二者の視点はまったくがう。国は国際間のとりきめ、つまりアメリカからのおしつけに絶対服従しながらの日本型食生活であり、企業はも

——日本型食生活は体にいいことがわ

——日本型食生活を高め、
国を大切にする政治を

——日本型食生活は体にいいことがわ

宮本智恵子

●みやもと・ちえこ 栄養士生活40年、5年前に、東淀川区淡路に住む主婦22名で「日本の伝統食を考える会」を発足させ、ユニークな活動をすすめ、今では、500名をこえる会員を有する。「学校給食を考える会」でも活躍。



私たちの食卓からみた「暮らし」づくりかえ

姫野恭子

共同購入、産直、分けあい市など生協の主人公として、活躍しているのは、組合員お母さん。子どもとの健康とお父さんの「元気」をつくりだす食事にどのような気くばりを心がけているのでしょうか。

素材を大事にした食事づくり 今岡さんを訪ねて

やわらかくて美しい笑顔、職員たちがとても主婦には見えないと噂した、八七年度新東三国小学校区の運営委員長の今岡さんは、三人目の出産を控えています。

「貧血のないよう」、分けあい市の小松菜など意識して食べています。検診のとき、保健婦さんに「ワーキーな血液してはる、血の色がちがうよ」といわれてとても嬉しかった。元気な赤ちゃんを産むためには、食べ物のことは

大切と、人にいって生協に加入をすめてきたんですもの」と、この一年、一生懸命生協に打ちこんでてきた姿が、伝わってきます。

「主人が、うす味でないと野菜の味がわからなくなるといいますので、それを守っています」

「それから、シャツシャツ、焼き肉などもできいのタレで食べるといみんなおなじ味、野菜もドレッシングで、原材料がよくなくても、それなりに食べられるから、素材の味でなく調味料の味で食べている人が多いのではないかしら」

いま、味覚の分からぬ子どもや大人がふえている」と、原因の七〇%は食生活にあり、加工食品のなかの添加物の味に原因があるのでは、という話があります。まことに風土にあった食生活を大切に、季節と素材を生かした食生活をしなければ、と思います。「生協の材料で、お弁当づくりに苦虫する

のは、色どり。黄色は材料がそろうが緑、とくに赤がないので(生協のハム、カマボコ類も赤い色をつけっていない)トマト、イチゴを添える。今日は、おにぎりの真中に梅干をのせたものと、いつも活躍している人参。その他、ハランを赤にしたり、桜枝を赤にしたりしています。みなさんはどうしていらっしゃるかしら。生協の商品でたりないところは工夫して安心できるお弁当を食べさせたいですね」



右が今岡多栄さん。左が岩竹つぎ子さん。
おふたりは近所のお友達です。



分けあい市で旬の野菜を岩竹さんを訪ねて

「私は鹿児島の田舎で、毎日、旬の野菜を食べて育ちました。それに中学生くらいから夕食を用意するのは私の役割。材料はかきられたものですが、毎日少しずつ変えるよう工夫して煮物を作っていました。いまもあまり変わらず父と母がそうした食生活をしている」と元気でいるのは、空氣もいいし

です」と、金糸卵にグリンピースをあしらった色合いの美しい五目寿司が目の前に出てきました。

「ときどきたくさん作って、近所にお分けするんですよ。この住宅にお住いの方はほとんど組合員で、焼きそば、お好み焼き、菓子作りなど得意の方が

いて材料を持参すれば一緒に作ってくれるんです。だからメニュー以外の食べ物が食卓に乗ることが始終あるんですね」

「PTA役員や看護婦、運営委員と忙しい人の多い班ですが、COOP商品・産直野菜で食生活ができるんです

くささを少なくしたり、香りが弱く、くせのない味に作るよう努力しているとか、みかけの良いものとか、新鮮にみせるために薬品が使われるなど、市場での価値を上げ、よりもうけのできる作り方が農家に要求されているみたいですね。

私たち、分けあい市や産直をとおして、ほんとうの消費者の声を届けた野菜作りをお願いしています」

彼女は、手ぬきの生活はイヤと、食生活も加工品はできるだけ使わず、手作りで頑張りながら夫の健康と子どもたちのため仲間を増やし、生協で協力して、よりよい生活をめざしています。

茨木市の水尾に住む扇山さんは、家族の誕生日、節句・季節折々の行事食

を自分で作っている方です。

「凝ったものではないけど、赤飯やひな寿司、おはぎ、だんごなど、旬の材料なら自分の好みで味つけができますし、何より安価で量が多いのが良いですね。味噌や果実ジュース、梅干しなど自家製で、ときどき田舎からは魚が届くので、おもし方も覚えました。これは昨日送ってきたもので作ったん

「お野菜をたくさん食べなくて、共同購入の野菜だけでは足りない分、エリア内の高槻の農家で、旬の野菜を月二回届けてもらつて『分けあい市』をしています。

その日の朝取りで、新鮮なことがなにより嬉しい。茎が柔らか、すじがなく甘みがある。他の家でも子どもたちが、ミズ菜などもバリバリ食べてくれると、喜ばれているんです。どこの家庭でも子どもたちに野菜を食べさせることに苦労していますが旬でない野菜作りには無理があり、化学肥料も多く使うし、味にも違いかでてくる。かたさや二方味があつたりで、よけい野菜嫌いを起こしているのではないかしら。

その二方味も本来の二方味でないし、また好まれないからトマトの青し、また好まれないからトマトの青し、



扇山美奈子さん。

扇山さんの五目寿司



食生活を中心とした班活動 扇山さんを訪ねて

茨木市の水尾に住む扇山さんは、家族の誕生日、節句・季節折々の行事食を自分で作っている方です。

「凝ったものではないけど、赤飯やひな寿司、おはぎ、だんごなど、旬の材

料なら自分の好みで味つけができますし、何より安価で量が多いのが良いですね。味噌や果実ジュース、梅干しなど自家製で、ときどき田舎からは魚が届くので、おもし方も覚えました。これは昨日送ってきたもので作ったん

「お野菜をたくさん食べなくて、共同購入の野菜だけでは足りない分、エリア内の高槻の農家で、旬の野菜を月二回届けてもらつて『分けあい市』をしています。

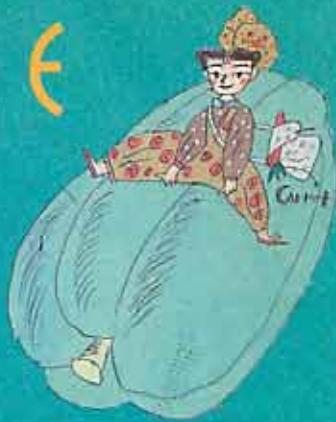
その日の朝取りで、新鮮なことがなにより嬉しい。茎が柔らか、すじがなく甘みがある。他の家でも子どもたちが、ミズ菜などもバリバリ食べてくれると、喜ばれているんです。どこの家庭でも子どもたちに野菜を食べさせる

ことに苦労していますが旬でない野菜作りには無理があり、化学肥料も多く使うし、味にも違いかでてくる。かたさや二方味があつたりで、よけい野菜嫌いを起こしているのではないかしら。

その二方味も本来の二方味でないし、また好まれないからトマトの青し、また好まれないからトマトの青し、

「いままでは班会を開くのも部屋がせまくてたいへんでしたが、組合員センターがすぐ近くにでき、班会以外にもハイキングや公園に班で出かけたり、共同購入以外のおつき合いをとても楽しくやっています」とさらっとおっしゃのですが、五名から出発した班が一七名になり分班もできました。五年連続運営委員の選出ができるのは、共同購入を通して食べ物のつき合い、文化のつき合い、そして忙しいなかでも食事の仕度を合理的にされている様子がよく分かります。私たちのめざしている楽しい班活動だと思います。

PROSUME



よりよき生活と平和のために

●発行●

大阪よどがわ市民生活協同組合

〒564 大阪府吹田市幸町4-1 PHONE (06)381-0329 FAX (06)381-3198

編集・労働旬報社

定価=500円